

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年四月二十五日 印刷
昭和四十三年五月一日発行 (毎月一日発行)
(第三十二号)



No. 32

川柳明治百年昭和篇

五月号



気品あふれる シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。

その秘密は、東レテトロン®— 激しい動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。



東レ **テトロン** (ポリエステル) 100%
オルテロン
スーツ・スラックス
TOPAN 東洋レーヨン株式会社

川 柳 塔 社 主 催

路郎先生三周忌句会

★地方の方々に会いできるのも先生のお引きあわせです。

この会費は千円。お申し込みは二時。会場内で受けつけています。

★才三部 晩 餐 会 (同会場で)

閉会の辞 川 村 好 郎

席題 (三題・当日選者と題を発表。各題三句以内)

「人 生」 麻 生 霞 乃 選
「引 越 し」 北 川 春 果 選
「機 子」 清 水 白 柳 選
兼題「子」 菊 沢 小 松 園 選

★才二部 路郎忌句会 (二時から)

挨 拶 中 島 生 々 庵

★才一部 故麻生路郎先生 三周忌法要 (一時半から)

司 会 西 尾 栗
開会の辞 若 本 多 久 志

会 費 百 五 十 円

★下寺町からは南へ、日本橋三丁目からは東へ。

日 時 7月7日(日) 午後1時開場
会 場 光 明 寺 電話七七一・九二六〇番
(市電下寺町又はバス日本橋三丁目下車)

今月のことば

◎第43回NHKの放送記念日が3月22日に催されて私も大阪放送局に招かれ出席した。その日は偶然にも3月の川柳選評を録音する日に当たっていたのでいつもより一時間程早く出かけ、録音をすませてパーティーに出席した。

◎NHKが放送をはじめたのが大正14年3月22日と聞いて特に今昔の感深いものがあった。というのは私が大学を出たのが大正14年3月25日であるからである。放送開始三日後から爾来43年NHKと同じ年月の間を育って

来たわけであるからである。

◎当時のラジオ放送をラッパ型の拡声器で聴いた記憶、昭和27年頃路郎、水府両先生と交代で川柳選評の放送した頃の丸い録音盤の思い出、昨年の秋から近江砂人氏と全国向け川柳選評を隔月に受け持つ設備等が隔世の感のある立派な録音室。私はしみじみ年輪というものの厳しさを感じ、同時に40年間の社会の歩みの遅しさに比べ、春日遅々たる自分の姿を臉に描き乍ら録音をとるのであった。

雑草という根性で春に萌え

この老人まだよくくらくらいよく眠り

生々流転昼寝する日もある暮らし

何もかも知恵のない過去童話めき

会長三期そろそろ規格品なみの顔

中島生々庵

川柳塔五月号

川柳塔五月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

とつくにの旅で……………若本多久志…(2)

川柳明治百年……………(二)……………清水白柳…(22)

川柳初篇研究……………(五十九)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

秀句鑑賞……………後藤梅志…(28)

豊臣秀吉……………(五)……………富士野鞍馬…(40)

建和元年の

美人コンテスト……………(大陸巷談)……………東野大八…(26)

私論 柳論

とつくにの旅で

「群盲巨象を評す」という言葉の通り、僅か半月ぐらいアメリカやメキシコを廻った見聞記を、どれ程詳しく書いても正鵠を得たとは言えないであろう。

ここでは只、感じたこと思ったことを一つ二つ披露して責を果したい。

☆空路からアメリカへ入る場合、必ずホノルル空港の税関で査閲を受ける。何も引掛る物はない筈だが一寸胸が騒ぐ。

大きなスーツケースをかき廻していたゴツイ顔の税吏が、突然、「ホワット イズジス ブック」と怒鳴るように訊ねてきた。

これは、ハワイの柳友達に贈るつもりで句集「老の坂」十冊である。要するに同じ本が十冊もあるの、不審に思っただけ。

咄嗟のことで「川柳の本」ということを、どう言えば解ってくれるかと思案したが

「ジスブック リツン バイマイセルフ イツア ポエトリイ!」

痴 盲 録……………高 鷲 亜 鈍……………(39)
雅号ぶっちゃけばなし……………中 川 滋 雀……………(53)

自 選 百 句……………工 藤 甲 吉……………(42)
……………早 川 清 生……………(44)
……………清 水 白 柳……………(46)

近 作 柳 樽……………若本多久志選……………(30)

川 柳 一 家……………藤 本 礎 山……………(39)

短 詩 文 学 作 品 展……………橘 高 薫 風……………(41)

初 步 教 室……………菊 沢 小 松 園……………(48)

大 萬 川 柳「悪酔い」……………清 水 白 柳 選……………(52)

★ 柳 界 展 望……………(薫 風)……………(54)

★ 本 社 四 月 句 会……………(庸 佑)……………(56)

★ 各 地 柳 壇……………(文 秋)……………(60)

「心配」……………遠 山 可 住 選……………(50)

一 路 集 「代表」……………田 中 蛙 眠 子 選……………(50)

「駅」……………植 村 客 遊 子 選……………(51)

★ 編 集 後 記……………(白 柳・一三夫)……………(64)

と答えてやると「オウ！」とうな
って句集の一冊を取り上げ、バラ
バラッと見たあげく(日本字不解)
巻頭にのせた私の写真を見なが
ら、急にうあいそな顔をほころば
せて「詩というものは、いいも
のだ」と言いながら他の巻は調べも
せずに、OKのチェックをしてく
れたが、これも川柳の功德。詩人
の端しくれの幸だと思った。

詩の本が恐い税吏をほころばせ

☆サンフランシスコの空港待合室
で、はからずも出征する若いマリ
ン達を、家族や恋人等が見送りに
来ている風景にぶつかったが、そ
の母親達が泣き乍ら息子と別れを
惜しみ、恋人同士は固く抱き合っ
て愛別離苦の悲しみを分ち合って
いる姿を見て、我々が二十数年前
に味わされた悪夢を想い出すと共
に「どんなに悪い条件の元でも平
和ほど尊いものは無い」と言った
外国の学者の言葉を噛みしめ、平
和な日本に感謝した次第である。

出征の兵見送る母の涙傷し

(若本多久志)



中島生々庵選

高槻市 傍島静馬

社を辞めて己が小さいさやと知り

以下何通おれの祝電束の中

誘致してその粉塵になやまされ

払いもの老母にはがらくたとは見えず

さり気なく焦りしずめる眼鏡拭く

大阪市 水谷竹莊

身だしなみするはずライバル出来ている

宗教にすぎりついても浮かばれず

飲ませて損にならない友を呼び

小説のように浮気かたづけ

嬉しい日祝儀の袋母が持ち

岡山市 服部十九平

父ちゃんを本気にさせたプラモデル

先着の百名様になりそこね

幸福なチラシよ美女が鶴に折り

雪月花どれもお酒の種になり

年度末款内流用してしるぎ

大阪市 大坂形水

いささかの株持っているドル不安

官庁に務め気になるとばちり

スキーからリュック重たく戻ってき

若いのに混り補欠のバット振り

日帰りで潮の香嗅ぎにゆく故郷

大阪市 橘高薫風

女の名忘れ島の名まだ覚え

春愁の無より淋しき無限大

お水取り(二句)

火の粉ふる闇豊頼の奈良乙女

火の走る行きつくところ屋根の反り

真心をあげて淋しくなりました

大阪市 正本 水客

もう一寸もう一寸だと人生をさとされる

逝った人が楽になるように泣いたげる

鳥居のかげに沿ってまだらな雪のころ

白沙村荘（京都）

一木一石絵筆うごけば一如不二

伏見寺田屋

大提灯に明治維新がゆれている

平田市 久家代仕男

味気ない暮し造花も横を向き

エリートが無口皆んなで煙たがり

読経まだ終らず私語の女客

ぜい沢に倦き芋粥の老ふたあり

みの虫が唄いだしそな春日和

岸和田市 内藤きさ子

一日が始まるパンの車ゆく

新車拭くしあわせそんな瞳と出合い

ラブレターポストの中でもひやかされ

こまこいと思われたこと悔いていず

タバコ喫まぬ一生灰皿の掃除する

青森市 工藤 甲吉

草の実がはじけたみたいつけまつ毛

明治百年の一万円あわれ

リモコンのとおり月給日を帰る

裸木は無産者風の中に耐え

結局は馬耳東風に負けました

大阪市 後藤 梅志

貧乏はいいものしみじみそう思う

傾けて出るはうれしきマホー壘

スーパ―が出来欲深くけちくさく

佐波宣平博士の死

ぜんそくは治りますよと云ってたに

前立線除去

だいじなもの取り四年目の彼岸くる

大阪市 不二田 一三夫

突然出された指切りの手にあわて

世話もせず世話にもならず金を貯め

貧乏人の足音へ子猫ついてくる

寄席（二句）

先代の芸と名前が大きすぎ

マスコミに乗った若手のおそろしさ

倉敷市 野田素身郎

廃品回収暮しが分かるビンの数

断言をしてからこっそり辞書をひき

水虫よお前と春をまた迎え

忙しゅうもないのに主賓遅れて来

岡山県 浜野奇童

愚妻に聞いてみますとは哀れ

高原の早春

積雪の底から春の水の音

ひとり旅

弁当売りの声まで眠い夜の旅

踏み切りで手を振る見知らぬ子に応え

藤井寺市 西 いわを

読むものが増えて来たので積重ね

看護婦の指は冷たいものと知り

検温器チャンと挟んでにり落ち

冬の池水を落して軽からう

大阪市 福井野迷路

春一番犬にせがまれ六千歩

怒るまい茲だとぐっと唾を呑む

虫に似た読めぬ字前衛とぞ申す

小一へ緘口令のむつかしく

倉敷市 木村長三

あばら家に王心を養うの額があり

上善は水のごとしときからわず

空元気だけでは三日つつかさり

立春を過ぎて雪 雪 雪日記

岡山県 浜田久米雄

落ち着いたわが家はすき間風が吹き

またしても取り出す外来語辞典

もうすこし酔わねば書けぬ色紙なり

会者定離説いて葬式無事にすみ

倉敷市 井上旭峯

出不精が濡れて戻った花の雨

返り咲く職へ義足にある決意

飯場の灯暗し人間臭く寝る

階段の音が生きてる朝の寮

倉吉市 奥谷弘朗

いざこざもないが活気も見当らず

タイミング外して女将くどかせず

人間の智慧の浅さを水笑い

役人と云う温室でスローモ―

高槻市 若柳潮花

名取りそろそろこんな世界が嫌になり

揚幕で師匠も一度念を押し

紫香君令孫の舞台より(二句)

母の眼のなかいっぱいに舞う禿

走り出た禿へ嬉し鈴が鳴る

大阪市 山川阿茶

この冬はスピッツだけが風邪をひき

よいとこによい島があり基地にされ

二階の窓こわして入れるピアノ買い

フライパン一つでいためものばかり

池田市 黒川紫香

人生の終末に来て手をあわし

五六人走らせている発車べる

子の便り女親から先に読み

停年にならぬに銀行つきまとい

岡山県 横山一声

入学も卒業もなく春うらら

見合がすめば仲人邪魔がられ

スモッグと違う故郷の春がすみ

春の酒また友人が一人増え

富田林市 岩田みよ

言葉なく春めく夜道送られる

感じ方受取り方が又ずれる

腕力に負け気迫に勝つ自信
あはやなと自分へ言って悔しきり

奈良市 村上春巳

道具もうそろえて棚を吊れという

男性の群へ女生徒の群笑う

大和路の地蔵の頬に春の色

石仏を訪ねる旅のにぎり飯

大阪市 金井文秋

何しても駄目でエリート意識持ち

さい銭の音確めて掌を合せ

買いかぶられたようだが役を受けてくる

もうすぐに出るのに自動ドア閉まり

神戸市 仲どんたく

ビタミンを飲み飲み土曜へ辿り着き

茶飲み友達にしては女が匂い過ぎ

七転八倒 冷凍魚となり

コンピューター室T君結婚

仕合わせと答えました電算機

鳥取市 藤本礎山

炊事場の妻の倅せ帰省の子

言い分をじっと見返す女の瞳

明日と云う日あり夫婦で旅行する

シルエット重ねて妻に相済まず

島根県 藤井明朗

妻の里素通りをして叱られる

子に負ける妻の愚痴を叱るとき

雪解けの水ダムへ来て春の音

春春春 プラン第二次第三次

竹原市 小島蘭幸

化粧しても言いかと僕に聞くのなり

目にゴミが入り愛情ためされる

おばあちゃん彼女のことを聞きたがり

初めてのキス潮騒と太陽と

倉敷市 小幡里風

猫柳ふくらむやらずの雨に媚び

硝子越しハミング母のシルエット

土砂降りを飯場の隅で考える

魂を売った男に道がない

豊中市 戸田古方

のたうちまわって犬背中を搔いていた

死んだから死んだですまぬ不倖せ

引うけるとこまでくれば引うける

熱中をした瞬間にさめかかり

大阪市 西出一栄

古稀の欲喜寿まで背のびするつもり

生きる倅助けられたり助けたり

決意した禁酒へ妻の眼が笑らい

柩への誓い忘れた訳でなし

岡山県 直原七面山

太陽はあるさもぐらの生活にも

柵破る知恵さえ持たで豚に似る

褒められてまた披露する隠し芸

流行るから着るとは女哀れなり

京都府 大鶴喜由

無口にもなるようら腹知りつくし

天象と地象の中のアゲ雲雀

そのうわさ通りであればいい娘なり

うそつけばまとまること知りながら

大阪府 早川清生

アルバイト人事課がまず美人とする

犬飼っていない隣も小鰻買う

侵された歴史美人の多い国

経文難解ネクタイ嫌っていた父に

出雲市 尼緑之助

テレビのとりこになって朝のお茶

プラカード敵は殺せと押しかける

斗争の文字が戦争におわせる
お芝居が上手政党座談会

大阪市 西森花村

万博は成功だったネ地主さん
禁酒する度にお酒が旨くなり
よく食べてよくねそべてやせぐすり
小便をこらえる型でエレキ振り

大阪市 児島与呂志

物価高追っても追っても追いつけず
人生の諫め身に泌む七転び
内職が当てつけじみるのもひがみ
子が見てるよって目だけで叱るとき

諫早市 川岡靈眼子

方言を矢鱈使って借りに来る
第三者身の上相談知りたがり
子に孫に誇る勲章で価値がなし

長男大学帰郷

ボーリングトロフィ提げて来る休暇

大阪市 本多柳志

聖戦と云う名の明治百年史
休会中はしゃべり本会議は眠り
スモッグの底の春一番の路のとう

業績のカーブへ初心蘇えり

今治市 越智一水

葉牡丹は愛をつつんだように咲き
ひたすらに生きて政治へもつ怒り
集団就職そこにも孤独潜んどり
若草へ詩集投げ出す恋があり

門真市 福島鉄児

明治百年川の流れは濁れども
姑の抵抗仲間の人になり
煙草値上げいっそやめたるかと思えども
市場籠主婦の苦勞を積み重ね

大阪市 中川滋雀

スモッグも霞とみれば抒情めき
ふんぎりのつかないままで受話機とる
そんな氣にさせたムードが悔となる

房総の旅

潮騒に寝られぬ宿を湯に通れ

ハワイ 築山快夢起

隠し芸明治の歌ですましとき

級友三人の内一人を失う

歯車の一つが欠けた淋しさよ
美容院ずらり並んだ女武者

灰皿の中に口紅燃えている

竹原市 山内 静水

不正を憎む私は動けない

有難い事だが信用されちまい

白を持つ今日は基石ににじむ汗

予想屋にお礼をもらうほどに凝り

鳥取県 森田 布堂

類焼の元は隣のうちわもめ

いさぎよく三昧に合せて花が散り

鼻たれたまま鍵っ子に夕暮れる

つり銭は貰うと決めた子の使い

京都市 都倉 求女

篝火へ梅話しかけ夜匂う

糸くずをつけて昼風呂に来る男

豪雪も貪慾に吞む冬の海

減っても減っても増えている税金

岡山県 田村 藤波

兄貴兄貴と呼ばれておぐる破目になり

土佐犬の貫録めったに吠もせず

巢立ちした燕お礼も言わず去に

病妻の指図で種子蒔く日曜日

奈良市 宮口 笛生

五分咲きの梅に冷めたい夜の雨
もう一人ほしい夫婦に恵まれず

国鉄合理化反対スト

俺たちの死活に一つストの道

当局でまかない切れぬ汽車止まる

倉敷市 水粉 千翁

笑うことも苦しくなるお世辞

花名刺男の独り言を聞き

むきになるけれどえくぼが承知せず

鍋の底さらえて母の上気嫌

東大阪市 久米 奈良子

足を知る2DKへ灯をともし

本心は覆うすべなきシラノ様

ひっそりと忘れな草の春を生き

マイナスをプラスにトップレディたり

大阪市 木村 水洞

夫婦喧嘩から長屋の朝になり

コマーシャル長屋ぐらしに縁がなく

生甲斐を札所めぐりに托す齡

浮気など出来ぬ夫と侮どられ

大阪市 碑 弓彦

陽当りも今年限りとなる工事

想い出の道に変わった失意の日
あさましい知恵しか浮ばぬ下り坂
真似てみてまだまだ遠い芸の巾

ハワイ 古川 魔花麗

紫煙ゆらゆらあの妓の影を追う如く
大臣になった気持ちのたばこの輪
シガレットミシン四十仙の音で出る
我勝てり悠然として吹く煙

西宮市 島居 百酒

啓蟄であろうと炬燵でまだ待つ気

北欧旅行

北欧の風に入魚の夢も冷め
なんぼかは費わすように巴里の夜
日本字で時計屋がありチューリッヒ

泉大津市 高津 徹也

おばあちゃんの童謡薪は燃えている
思い切り蹴った小石に想うこと
小走りでまた縁談をもってくる
しかししかしと話つめ寄られ

堺市 青野 遊仙

自慢話し相槌打って聞くも年
清貧も妻から見れば甲斐性なし

傷心の白髪は染めぬ尽に伸び
魂の階段昇る寺廻り

諫早市 大崎 筆染

ライバルも嫁ぎのんびりしておれず
円満におさめて明かす裏話
蒸発をせぬよう妻に飼育され
人生のつぎ木のように二度の緑

青森県 工藤 安亭

東京っ子津軽の雪に息をつめ
雪五尺四股ふんで行く女子等
吹雪やみかまぐらの灯にわらべ唄
雪女外から風花のまま戻り

香川県 三井 酔夢

豪雪にオール電化は虚を衝かれ
雪しんしん愛の巣だった地につもれ
そのむかし愛に溺れた雪だるま

新居浜市 安藤 桂仙

寝返りの出来ぬギブスを撫て見る
隣からテレビ見に来る車椅子
検診へめんどくさそに腕を出し

宇都市 平田 実男
ホステスの素顔見て来た屋の火事

兄さんのようとはホステスうまく逃げ
風邪薬切らして飲んだ酒が効き

笠岡市 松本忠三

煮えつまる頃に一言居士が来る
住職の後ろでこっそり膝を組み
オーバーを脱げば冷い春の風

岡山県 藤原秋月

求人難なのにこんなにこき使い
ぼんやりと立てば犬にも見上げられ
税金が無けりゃと思うてみるも愚痴

西宮市 野呂鵜汀

豪農の富に慣らさる池の鯉
水槽も縄張りがある熱帯魚
押し売にお茶を出す程すれていず

小松市 馬場魚山

どうせ消える雪をあわてて捨てに行き
余寒厳し卵相場は張ったまま
餅嫌い等と平和な世に育ち

初孫誕生(一句)

鳥取市 河村日満

一応は親が名付けと譲るとき
この妻の他に妻なし口にせど

男同士に雑談はない応接間

松江市 柳楽鶴丸

壁一つ破れば又も壁があり
スタートが大切妻の飼育法
共稼ぎ妻におんぶされたまま

高槻市 山田季賛

真相を聞いて笑うてはおれず
例年の通りですと寄附の額
賽銭がソッケ無い音で落ち

倉敷市 本田恵二朗

にくたらしい顔で流感坐り込み
知恵の輪に指十本がみくびられ
雨だれがしずかに反省しろと言う

下関市 国弘半休

近郊が平和でお宮の鳩が殖え
口だけは達者初老のふところ手
借って貸す金で顔役良い暮らし

室戸市 奴田原紅雨

人間の顔してるのにひっかかり
子の後につづく夫婦に海が晴れ
愛してはならぬ凍魚の眼を作る

明石市 阿 万 万 的
城近く旧家としての屋根瓦

深呼吸せよと城跡海が見え

党支部も吹雪 火鉢を囲む人

名古屋 吉 田 水 車

辛いこと辛いと言うて少し楽

大声で同姓呼ばれギョットする

親にしてみれば気になるずる休み

和歌山市 西 尾 公 作

やっとドアしまり地下鉄人にする

停退に元の工場を見に散歩

尼さんが袂にパンを買って行き

堺 市 新 谷 笑 痴

父の死を大往生と云う他人

童話きく膝の腫が美しい

そのつぎをせがんだ童話のよい寝息

芦屋市 丸 川 初 甫

舟遊び花の山から見おろされ

リーダーの今年の抱負きくするめ

退職の三羽鳥で箸つつく

京都市 松 川 杜 的

母の膳だけ鯛のない誕生日

ささやきも楽し空の青さへ仏達
つくばいのつららへ竹の青光る

桜井市 岩 本 雀 踊 子

がめつく生きて行くにもコツがいる

苦情ききあいて窓口昼にする

本当の話をすれば笑うなり

ハワイ 加 川 カ ロ

老の坂降りは余りはやすぎて

まゆせまり短気あらわなお人がら

ベエトナムを思えば旅行はばかられ

愛媛県 渡 辺 曉 童

人様のお邪魔にならぬ世を求め

皇后さまのお歌の色紙春の部屋

土のおいも春のお彼岸

大阪市 吉 岡 美 房

若い日の俺と同じを意見する

無理するな風邪をひくなど無理を言い

焦点はミニとブーツの間にあり

下関市 桜 川 不 水

五十肩エイと力んで腰くだけ

春雷一発地虫どもは出る支度

掛軸を花鳥に替えて春を待ち

笠岡市 木山遠二

日日好日鷄愛し猫愛し

結構な身分になってほけはじめ

一票を思う通りにいれかねる

松江市 岡崎祥月

三度目の勧告蹴って立ち上り

物価上昇献立が又狂い

二男二女よい父となり一家無事

松江市 中川晃男

朝茶のむ仕草も亡母に似て老いる

巫女今日は新夫と並ぶ神酒を受け

盲目の光ともなれ点字打つ

美禰市 安平次弘道

ジンスが心の弱さをついて来る

酒値上げ花に間に合うように上げ

つぶすならつぶせと居直る程に借り

新居浜市 小林孝正

燃えるものもなく食うだけの鞆提げ

衣食住足って静かに雨を聞く

愛のかけらすらなく夜の灯に稼ぐ

兵庫県 大江秋月

子がみんな巣立ってからの薄化粧

内職の金でネクタイ買ってくれ

金策の背をマイカー族越してゆく

大阪府 今西章雅

病床へ理容師を呼ぶ春うらら

一本だけ抜けばと歯科医身構える

子に負けておけと嫁いだ娘に云われ

愛媛県 村上旭童

あっさりとまけておっさん酔うている

いい歳をして又あやまりにいくお酒

老人がぼつりぼつりと死んで春

熊本市 楠田英子

パトロンの好物冷蔵庫が覚え

ハイハイと柔順すぎるのも不満

のし袋中味は女房の指図まち

堺市 高橋千万子

むしんかと封を切ればよい話なり

値も知らずテキの厚さに有頂天

万国博誰が一番もうけるか

高石市 谷沢好祐

急いでる切符へ自動機狭い口

本心を喋って大臣首が飛び

二拍子でポンポン基礎の杭を打ち

下関市 中村九呂平

愛情の気持か無駄な油かす

植え替えた新床猫が糞をする

手を入れたほどに答えた葉の厚味

出雲市 原 独 仙

また法螺を吹くなと視線外らしたり

へそ曲り成程頭の堅い人

早春を二三日三毛も帰えらない

熊本県 有 働 芳 仙

恋をしているから日記つづくなり

落日へ突き離された貨車に似る

窓を明けても隣りの窓があり

呉市 林 野 甍 光

酔うていたとはアリバイのおぼろげに

朝の陽へ移り香捨てた衣更え

常識の限度をホステスから習い

宝塚市 小 畠 無 聖

雀にも都の好きが二羽三羽

イニシアとなって威厳のない家紋

敗戦の飢える修業が役に立ち

大阪市 室 谷 鉄 舟

焼けてから非常階段指摘する

仲裁が馬鹿らしくなる欲と欲
階段に本当の歳を知らされる

守口市 羽 原 静 歩

昭和二十四年五月逝きし母を憶う(享年七十七才)

算数が百点だった母の顔

追伸に餅を送ると二三行

生田流小勾当への長い道

大阪市 天 正 千 梢

み仏のおわずに奈良の地がさみし

反省の場浴槽に身を沈め

夏に花見よとて寒肥はずんどき

姫路市 隠 岐 不 醉

陳情団予算がネエであしらわれ

女房の内証横目で相場欄

年賀状前垂をして戻って来

富田林市 川 端 東 雲 楼

言い負けて女泣くより手はなきか

風采のあがらぬ彼にある魅力

一人のマッチにさえも出来不出来

香川県 岡 田 拳 法

紳士やと見紛う俺の目はガラス

力無き正義齒ぎしりでもするか

末弟結婚へはなむける

春風を寒波を招くのもふたり

岸和田市 葛城伊三郎

代表の祝辞へ腹の虫が鳴き

一万円札出して駅弁断られ

傘忘れ慌てて降りた次の駅

八代市 永松道雄

無力では取りつく島もない漁船

これ見よと咲く執念の臥龍梅

掃除機にしかられて立つ老夫婦

和歌山市 土谷城石

内側からかけて天国家族風呂

スト真似て駄々こね出した町工場

夕餉だけパン抜きにする共稼ぎ

大阪市 西川誓二

焼香順後になる程じれ初め

市場籠チラシの品だけ買い漁る

ちよっと待ての立札を見て気を直し

岸和田市 植山武助

薄幸の女へドラマまだ続き

押し付けられて汚職に巻き込まれ

二ツ三ツ若う仲居の齢を当て

伊丹市 小川静観堂

蒸発するところをおんな沈黙す

新婚へ猿の掛軸はずしとき

お水取り東大寺ですご名答

大阪市 宮尾あいき

胸のしこり茶と羊かんで押し流し

金策の出来た御札の御燈明

お入試は如何と恐る恐る聞き

大阪市 宮地双楽

どじふめばふむほどあせる初舞台

芸術を雪でかためる札幌市

一轍の父にとりえの几帳面

松江市 小林孤呂二

男ざかりと厄年勞わられ

春や春道交違反でとがめられ

入学を祝う心の花鋏

東京都 大山雅城

盛大な葬儀うれしさ悲しさ

逃げ腰になって捨猫媚をうり

八年目やっと二人で一人生み

兵庫県 河原みのる

愛犬ミツクの死(二句)

極楽へ通る鑑札つけてやり

ミックと呼んで空しく小屋のぞき

豆腐一丁電話で頼めばカーで来る

兵庫 遠山可住

ぶり返す寒さをお水取りにする

炊飯器女房の留守をちゃんと炊き

ポツリポツリ入るパチンコにあしらわれ

小松 関戸宗太郎

加害者も生活があり死をえらび

外人のような鼻筋でも困り

春うらら老婆の愚痴へ歩をあわせ

大阪 河井庸佑

はしにも棒にもかからぬのが社長

旗ふって聖職がどうのこの

だぶだぶの服で入学式並び

岡山 大森娛句楽

豆撒きの後は喜ぶ鳩ポッポ

ほころびも今日はなおせぬ針供養

風邪毎に着膨れの癖ついて春

鳥取 清水一保

賃上げはしたし値下げは尚したし

国民のどちらも味方議会荒れ

大臣の名より力士の名を覚え

大阪 川口弘生

終点でお疲れ様と降ろされる

コーラスにママは昔の声を出し

親子ともズル寝は寒い日曜日

加賀 木村一路

つれづれの日記注射の痛みだけ

退院

迎えの子腕一杯に抱いてやり

退院の背へ禁煙をまだ云われ

米子 石坂新雪

生コン車ユックリ廻る春の風

貧相な女に見える金が出来

葬儀屋の鐘町内だけならし

岡山 池田古心

恋心用事頼まれ嬉しがり

せめてもの三昧が合わせた節まわし

億万長者だとして稼ぐに法の裏

笠岡 木山要次

妻の留守寝押しの折り目笑われし

春のスタート木の芽草の芽身構える

七転び今度は痛い王手飛車

鹿児島県 土岐トク子

御栄転と云われ気になる赴任先

平凡な妻の座すき間風の吹く

やきもちじゃ御座いませんと妬いた顔

和歌山市 垂井葵水

接吻が予約とならず嫁にゆき

不寐な目が胸もとを挟りとり

押ピンをそえて選挙の顔が来る

大阪市 賀本昇

へそくりを後生大事に置き忘れ

貧乏を承知で嫁ぎながら愚痴

開拓地ニッポン地図を徐々に替え

鳥取市 森本法泉水

広島出張(三句)

原爆を忘れたように空は晴れ

原爆ドーム向うはプロの野球場

慰霊塔シャッターをきることとなり

出雲市 野村岬月

あらたかただけでうかると云わぬ神

汚職なき地位で小さく小さく生き

泉佐野市 大工睦夫

お天気ジグザグ模様は陽は伸びる

郷関を出で角材で火なぶりし

加賀市 細呂木魯木

お前もか俺も淋しいんだ鳥一羽

和服の似合うホステス夏をきらってる

福岡県 太田湖平

老妻の贅は形身になる着物

アマチュアの初手合せは対でゆき

京都府 清水谷句楽坊

彼岸経 師の声まねてあなかしこ

卒塔婆の文字に先師の技法まね

ハワイ 羽佐間柳葉

糖尿病哀吟

糖尿病何の因果か食地獄

旺盛な食欲それで痩せ細り

★

若本多久志

旅なればわが靴の艶よしとする

するどさに友情を知るアドバイス

限界が来たと辞めたい日が続き

記念撮影俺だけムツつりして写り

社長社長と頼らない俺をよび

菊沢小松園

夫婦とはこうして出来た猿ヶ島

予定ない旅に出たいとおもう金
決断を迫る女の眼がからみ

一期一会女振り返えりもせずわかれ
今借りた金をマツチの火が照らす

凡人の夜は定量の酒で済む

夢捨てに立つ窓があるほの白し

悼 藤木主税

席とって置くとも言わず先に逝き

清水白柳

川村好郎

ゴールドラッシュ女房無言で消すテレビ

謙遜も心の奢りかくし得ず

気がつけば金魚も春の泳ぎよう

これでよし潮の満干に似た家計

中島生々庵著

川柳講座

大阪府医師会の機関紙である大阪保険新聞に18回にわたって連載され、路郎、三太郎、水府諸氏の名言などもあつめ、初心者用に執筆されたものである。

★郵券五十円封入の方へ一冊進呈。申込みは川柳塔社へ。

整理上なるべく

ご利用ください

川柳塔柳箋

一冊 65円・送料 35円

マチカワペン



優雅な書き味

咳払いぐらいで言い過ぎまだ止めず

西尾 栗

社長の性談古典落語めき

問答無用自分がいっち可愛いなり

妥協の早い夫で気をつかい

裸木の美冬陽落ちんとす

置葉でなおった風邪を笑うて起き

北川 春 巢

聞く耳はあるがだんだん遠くなり

心配ごと毎日あって生きている

患者叱りつけて名医ともいわれ

命預けてくれるかと医者嬉しそう

どうもどうもという口癖をおぼえられ

川俣柳 初篇研究

(五十九)

前田喜代人 川端柳風
岡崎重義 高須啞三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

481 おばあさまといわれ若後家ハちゞみ

梅 斧

川端 先妻の子と後妻の年が近いので孫かと考えたが、それならいくら若後家でも身のちぢむ思いもしないだろうし、後家になる以前からのことで、おばあさまと呼ばれることに馴れているだろうから、若後家になってお齒黒をしているのを、別な子がおばあさまと呼んだのであろう。

高須 よく判らぬが、若い後家が切り下げ髪でいるのを見て、幼な子が「おばあさま」と言ったので身をちぢめたというのではあるまいかと思う。

若後家は業腹そうに孫を抱き

一七・29

という句もあるから、その後家のことか？ 前田 若後家で、まだばあ様の自覚が浅いところへ、突然、「おばあ様」と呼ばれた

ので、ぎくりとちぢみあがつたぐらいの意で、後妻の場合、主人がなくなつた時にはよくおこりそうなことであらう。

丸 高須氏引用句の若後家と解す。

岡田 高須氏のいわれるように、後家の摘髮（つみがみ）姿を、髪は少なくなつた老婆と子供の眼に見まちがえられたのであらう。

482 渡世とて常の下駄をはかぬ也

川 弓

川端 下駄は仙台侯の伽羅の下駄と吉原下駄が考えられるが、吉原下駄は雨天に吉原からの帰り客が買うもので関係ないように思う。常の下駄でないとすると素人はあまり履かない駒下駄ということになる。句意は芸妓になつたの意であらう。

高須 吉原の大夫下駄のこと。

三の字を踏み出す雪の八文字 天 保
で、大夫のはいた三本歯の駒下駄、すなわちオイランは「普通の下駄」ははかなかつたのである。

前田 「下駄をはく」は買物の上前をはねること。「渡世とて」でこの意が感じられ「常の」も活きてくる。

丸 礎稿賛。踊り子の駒下駄。

483 口中をすゞやかにして箱根越ス

門 柳

川端 江戸の俗に「箱根からこつちに化物なし」とあることから、旅の垢をおとしての意か、閑所を越して変装を解いたのか？ 高須 小田原の女郎（うしろ）を詠んだ句である。女郎とは女郎薬のこと（げん）の人、礼部員外郎陳宗敬が応安年中わが国に帰化し、博多で創出した痰の妙薬で江戸時代に、小田原で売り出し有名となつた。今の仁丹のように口に含んで涼やかな香気があつた。

歌舞伎十八番の「女郎薬」は女郎売りの物真似やその効能のセリフを雄弁にまくしたたためで、当時いかに物珍らしく有名であつたかを立証するに足りやう。

前田 わからぬ。女郎薬は小田原では、永正十六年（一一五九）——大永三年（一一七九）の間の発売といわれ、陳宗敬の子孫が正洞院で製造販売した。江戸での出所

は両国横山町一丁目、虎屋伊兵衛の説があるが、「江戸買物独案内」(文政七年)の虎屋の欄には、その名を見ない。

清二高須説の通り「うしろ」を詠んだ句。

この外郎薬のことは「東海道中膝栗毛」の小田原のところにでてくる。いまも小田原の虎屋という店で売られている。

丸・岡田二高須説賛。

484 寺の帰りに尺八を買のに寄り

万 庵

川端二寺は正燈寺のこと。正燈寺の紅葉の帰りに吉原へと遊びに行った。正燈寺に紅葉を見に行くとき出かけたが、例によって吉原に行く口裏に尺八を買うことにした。対象人物は息子であろう。

高須二これは人手にかかって無念の死を遂げた父親を葬った寺からの帰り、虚無僧になるため尺八を買うといった句で、前出の「口惜くない尺八の面白さ」と全く対照的な句である。

岡崎二賛。「一ト月の稽古でかたき打ちに出る」(天元礼一)

藤井二寺は虚無僧の本山ではなからうか。京なら虚雲山明暗寺、関東なら小金井の金竜山一寺で、そのまた末寺にしろ普化宗の僧侶となるためお寺に出かけ入門し、その帰りに尺八を求めたのではなからうか。正式に入門しなければ天下晴れて尺八は吹けないと聞いている。従って敵討ちとまで考えなくても句は成立すると思うが。

丸二高須説賛。

岡田二小生は藤井説に賛。虚無僧になるためには、関東では小金井の一寺、その出張所(?)が浅草であり、寺はそれを指す。認可を得て、その足ですぐ尺八を買うという句だが、尺八を所持してないだけに、敵討ちの望みを抱く男にちがいない。

485 えんまのてうをかけぬけて尼に成

五 扇

川端二松が岡の句。「えんまのてう」は鎌倉新居閻魔で、運慶作の閻魔が安置されている。「東海道名所図会」には「新居閻魔由井浜大鳥居の巽にあり、運慶の作、応永大乱に亡魂弔ん為此に造立しけり」とある。尼はもちろん有髮の尼。

高須二松が岡の句に間違いない。「エンマの序を馳けぬける」がヤマで、それだけがみつけどころで作った句。

丸二賛。

岡田二同。鎌倉の新居閻魔は始めは由井ヶ浜の方にあったが、後に建長寺の向かいがわ松岡山東慶寺の並びに移された。運慶作などといわれるが、その真偽はともかくとして、なかなかボリュウム豊かな立派な作である。

486 柿の木の上であやまる馬鹿な形

一 甫

川端二柿の木にのぼって盗み取っているとこを見つけれ、おりて逃げもならず、

木の上で許しを乞うている滑稽な形(姿)を詠んだ句。

高須二ただそれだけを言ったつまらぬ句だが、狂言「柿山伏」を背景としたものであらう。

清二柿の木は折れやすいから、うかつに細い枝にのり移って逃げることもできぬ。

丸二賛。「馬鹿な形」にその姿態がほうふつする。

岡田二狂言「柿山伏」まで考えず、礎稿のままでもよからう。

478 髪結八鯉をくわないやうな鬘 眠 狐
川端二髪結いは髪結床。鯉は徒然草に「鯉のあつもの食ひたる日は、鬘そそけず」と推賞している。句の髪結床は上手でよく流行するため、自分の鬘がそそけだっても整髪する暇もない。「あの髪結いは鯉のあつものを食ってないので鬘がそそけているのだらう」と表現したもの。「ほうく」とした髪結は上手なり」という流行髪結床の類句がある。

高須二礎稿通り徒然草の「鯉を食った鬘」を言った句である。「紺屋の白袴」の一種。

岡崎二鯉のあつものを食えば鬘がそそけずとは、徒然草にもあるが当時の俗信でもあった。

藤井二鯉は今ならビタミンAやビタミンDと言う所、俗信だけではかたづけられないかも知れない。鯉こくは乳の分泌にと今でも食べている。

丸・岡田二諸説賛。

川柳明治百年 (二)

昭和 篇一

昭和 四年

奉祝にやつと国旗を買ひました
奉祝に丁稚散髪してゐるなり
長屋から養老盃を一人出し

貴山
文蝶
彩秋

沢正の死を悼む

其の一派に慰められて居る喜世子
沢正追悼劇を見て

柳路

ふと喜世子せりふが詰りさうになり
社会民衆党支部創立

観月

真剣になる程女房笑いこけ
山本宣治刺さる(元芳農宅)

万よし

匕首も主義には力なかりけり
大阪に龍駕奉迎

ひろし

喜びやよしや貧しくとも赤子
新政党に大命降下す

路郎

新党の扉をへだてて柿は落ち
ツエッペリン伯爵来る

源坊

母親は地球の事も知らず死に
田中總裁の逝去

花菱

遺言もなく緊縮の秋を過ぎ
減俸時代

吐句坊

減俸騒ぎを鶏頭が笑つてゐる
共産党狩り

路郎

もの言へば治安警察法があり

素人

昭和 五年

金解禁の井上蔵相へ

奥さんと金解禁コント位にやまでせう
借家人組合結成

路郎

三割まける 不労所得だい

ひろし

清水白柳

昭和 元年

「川柳雑誌」から

大正天皇を悼み奉る
草莽の臣かなしみの炭をつぐ
十二月二十六日

路郎

神去りしのち静かなる松に見え

花蝶

昭和 三年

昭和 二年

皇乳砲悲しむ人の波に来て
篝火のかげに億兆声をのみ

千代二
三休

謹んで座れば寒い膝頭
民族の血を淋しさの底に知る
よろづ世の中になしきみうける臣
仰ぎみれば東の空はくもりがち

錦浪
夢二郎
溪花坊
緑郎

丹後大地震

美の作

鍛だこの手で丹後から泣いてくる

柳路

芥川もうパイプルの字が見えず

柳路

芥川龍之介の死

柳路

大山都夫落選
大山を落した事を口惜しがり
西園寺公のお花さん
青森種馬場
種馬の精液が飛ぶ春風や
御大典奉祝
病んでゐる身にもかどまで出て祝ひ
篝火の大礼服をちと燻すべ
賜讃に召されて
平民にまでも御心垂れ給ひ
御大典の大敗
奉祝は万才といふ事なのよ
奉祝にここから幕の違ふ町

柳路

毒仙
柳路

革郎
猪牙平
路郎
濟明
花童子
黒天子
二柳子

路郎

浜口首相に暗殺未遂事件

浜口さんの口元さむし寒の入り

無罪寛

金見たら一ト足逃げる面白さ

金は無くとも金は無くとも君と僕

春場所の国技館

出羽ヶ獄ちよこくされてちと困り

罷工団敗る

闘つて得しはたなぞこのだるさのみ

縮紡争議

三割が騒ぎをよそに膝枕

検束されてゆくのを蜥蜴が見てる

尾崎号黨衛の講演行脚

七十の皮肉に拍手が嬉びた

市バス会社バス併行路線

青バス銀バス 河岸の巡査よ

国勢調査

うちで書くさかいと帰る五分前

阪急前にて

憂うつが田中巡査に氣を交へる

神戸沖觀艦式

御召艦近く吹奏なかばなり

あれが陸奥あれが霧島朝霧の

神戸海港博

ロボットの出す広告もときれがち

昭和六年

整理類々

ワイシヤツの汗も悲しい誠首だった

今日も又狹き日本へなげだされ

地震の流言しきり

路郎

路郎

琴人

町二

虚白

苔香壺

緑之助

路郎

白柳子

乱子

柳秀

二南

明珠

寝そべつて逃げる道など考へる

小出機重を悼む

裸婦かたづけてあるじ用ふ

滅倭案

絹夜具の中で滅倭案生れ

月給袋軽き思ひは妻もする

蜂の巣をつついてしもた若槻さん

思想犯取締

特高に戦旗・改造・資本論

東西松竹合併記念興行

中座から当選浅れを刷つて来る

ブラック・チェンバ

列国の機密を嗅ぎし吸取紙

第一艦隊旗艦長門

水兵の見上げるマスト大将旗

日支交戦

装甲車威圧に一つ打って見る

王正廷なぐられる迄いい度胸

昭和七年

大義首相の死(五・一五事件)

待つたなしの歩にさされたる犬養毅

満洲事変に際し

商人のもうかるまでに事変やみ

龜ノ瀬トンネル地にり

隧道はへつびり腰でのぞかれる

地下鉄作業(大阪)

太陽を見ぬ文明の基礎工事

有田洋行の象に

明日居ない象へお諸をやりに行き

新満洲国成る

専路

路郎

路郎

山路

沙門

万よし

二南

乱耽

水車

柳路

柳路

路郎

路郎

佐顯

山雨楼

雨町

寿枝女

苦力ただ奇麗な旗と見るばかり

米価八円

犬養毅氣しばらく嬉し地主様

若槻民政党総長に

ええことは好えではすまぬ世相たり

国際連盟調査団の再入京

満洲と云う象を見て来た調査団

リットン卿

目の玉を入れかえて視る気はないか

三浦環の帰国

十年の黒髪謎誰れが解く

三井黄金給食

大盛りや中盛めしの舌ざわり

大阪歌舞伎座成る

三碧

天痴人

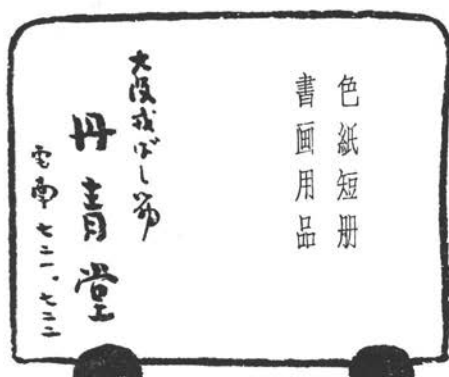
天痴人

琴人

草村

民郎

いわを



洋風の軒にとぼしき絵看板

聖駕奉迎(大庭)

サイドカー脱帽させる音で来る
天主閣をバツクに天皇旗を拝し

石川興小松大

類焼にあすの太陽待つとする
白墨の字がまだ消えぬ桐だんす

前畑秀子ロサンゼルス平泳

世界一世界二人帰つて来

昭和八年

勅題 朝の海

こども君太平洋につづく海

土木救済事業

監督の前でも乳を哺ませる

川島芳子座談会

男装の妖しき功もねぎらはむ

松岡全權

ゼネバに動く世界を蹴るではないか

國際連盟脱退

ジュネーブは遠し日本は梅が咲き

松竹レビニー団争議(高野山)

僧坊にダンスの足を投げ出され

昭和九年

防空演習

仇討の身装よろしく婦人会

今日の雲敵機来る日の雲になり

密戸台風

大毎も止まり豆腐屋も止まり

大風を刑務所だけが知らなんだ

水車

青踏

葉平

卯三

柳村

二南

路郎

艸楽

民郎

羅門

緑之助

二南

遊女男

春秋

豆秋

同秋

黙祈の浜辺に下駄が浮いてゐる

春団治近く

笑わしになが草鞋をはくのなり

昭和十年

陸戦隊上陸

嬉しきは水兵さんの肩の幅

関市長と濱治郎の死

市長さん一寸待つてと成駒屋

満洲國皇帝奉迎

大昭和大康徳の御握手

天王寺公園に池上市長の銅像

高すぎて大阪中のアラが見え

伊東ハンニ氏

ハンニズム相場欄から眼をそらし

キャバレー赤玉腸チフスで休む

大改造チフス出たとは書いてなし

國勢調査

國調へお妾さんの歳が知れ

昭和十一年

二・二六事件

春寒し拾ひ牛のない首二つ

戒嚴令下の東京

呼びかくる声は赤子よ兄弟よ

野中四郎大尉自決

勅命に抗して悲し雪と散る

西園寺元老

建直し緩部でなくて興津の手

中里介山立候補

大菩薩峠を背に立上り

末広艸

夕鐘

水客

春光

喜由

豆秋

いわを

与三郎

史呂

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

黄銅六角ボールトナット

及び特殊換物全般

合資
会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 660 三四五二一四

夜間 660 四四〇八

高橋蔵相(經管増税案)

増税を論じバツトを投げ捨てる

伊東ハンニ捕わる

手にとつて見ればお前も人絹か

二月二十七日

高橋も亡くなつたピアノを止しなさい

前畑選手ベルリン・オリンピック優勝

只泣けてく優勝台に立ち

昭和十二年

統後風暴

千人針胡瓜抱えた手でも縫い

千人針巡査やさしく道をあげ

統後統後飲まずに辻で別れたら

末次海軍大將北交視察

髪が無い閣下へ芸者もの足らず

社会大衆党

社大党葉巻くわえた姿なり

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

愛国切手発売

神聖なる交際愛国切手貼る

支那事変

さあこいと追加予算の二十億

飛車角が成つてしまつた支那事変

祝上海大原攻路

戦捷へ祖国は菊の盛りなり

出征つづ

見送りの中に丙種の顔が見え

防空演習

探照燈雲のうすさもよく見えて

神風号世界一周(四月)

地球儀をかあるく廻る神風号

昭和十三年

祖父鳩治郎追慕

戒名の似合はしからぬ成駒屋

北支戦線

青春すばらしく長城に立つ戦士

舞台空虚友田恭助戦死せり

祝南京陥落

皇恩に支那の鳥も安堵する

南京占領

歴史的進軍中に僕も居る

蔣介石長沙にのぞく

敗戦の歴史を重ね野にかくる

軍事郵便

軍事便母の切火の尊くも

応召

軍服は覚悟の髭によく似合い

塵箱へ突つ立ち上り訣別す

戦線拡大

彼も彼も漢口らしい九月なり

「戦跡保存」〇〇部隊〇〇部隊

慰問文子供に書かすところをあげ

転産業初まる

転業の今日愛嬌を忘れてる

昭和十四年

近衛内閣総辞職

磨一步退き小手をかざしたり

平沼親一郎男に大命降る

パトンを受けて独身知れわたり

双葉山六十九連勝後四敗

医者もさるもの負癖病と診た

遺骨帰還

プラツトの御霊にすまぬ車窓ごし

政友会へ

総裁にミス・ワカナではどうですか

宣撫班

宣撫治療ヨハネ馬太伝など思い

高藤大使

につこりと太平洋の人柱

物資統制

統制の話聞くだけ聞いておこ

人事のやうに統制案が出来

統制へ女主人の勝気な眼

日英東京会談

一揉みに現地は潰す気で居るに

市街戦もすんで

邪魔だつたこの高層の英仏旗

平沼前首相へ

御苦労の声も聞けない独り者

誰が出てもおかんと思ふ日もあらむ

宣戦布告のイギリス

少し離れて拳骨を振りまはす

歐洲大戦へ帝国不介入(阿部内閣)

阿部さんはハツキリ支那へ向き直り

徴兵令公布

今日からは俺も兵士のダンブクロ

南地花月

ほた何かほたら何かと春団治

三木助の綺麗に扇子置いてサゲ

路郎

路郎

路郎

孤蓬

同人

同人

同人

同人

同人

同人

同人

同人

同人

同人

同人

同人

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18
三洋電機樹木本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

旅行・宴会・リクリエーションの
ことならどんなことでもご相談くだ
さい。

楽しい旅行のコンサルタント

建和元年の

美人コンテスト

東野 大八

緑陰に藤椅子のほどよき昨今、句作の疲れをときほぐして頂こうと、今回はちょいとばかりおいろげばなしで、お茶うけの代用として頂こう。

阿房宮の始皇は、後宮三千の美女をストリップにして、腹はいにさせ、そのすべすべしたお尻や背中を因幡のウサギよろしくわたり歩き、つい足ふみ外してベタンと尻もちをつくと

「チンはこれと寝るぞよ」

と鼻の下をなでたという。

こうした後宮数千の美女のムードにあこがれて、明の富豪嚴東楼は美女五百人を身辺にはべらせ、カーッと口を鳴らすと、美女の紅唇が待っていたという。美人の口ををたんつばにするとは不届千萬な成り上り者奴と時の政府は、彼の全財産を没収して、今のベトナムへ追放した由。

徳川時代の大奥には、美女数百人がいたというが、中国宮廷のマンモス後宮にはまるで齒がたたない。嚴東楼の邸中とどうやらつり

合う程度だ。ところで、その傾宮、阿房宮の美女群は、どういう段どりで、帝の身辺にまかり越したか、今日のお話はその美人コンテストの選衡規準ややり口の紹介である。

中国の古本に「雜事秘辛」というのがある。一口にいうと宮女の選衡用の体格検査報告書である。漢（紀元前二一〇年ごろ）の秘録なのだが、後世のヤボな大官が廢棄処分にしたのを、明の楊慎が粹を利かせて苦心蒐集した資料で再製したもの。

これが漢代から清朝におよぶまでの、後宮用の美人選衡用のテキストとしてエンエンとして活用されつづけてきたわけだ。中国の大奥秘帖のエキスといわれる後漢書后妃伝は、この雜事秘辛を借用したことを明記しているが、選女の一件にふれて、その序にこうある。

「漢の法として八月には算人の行事あり、中大夫、相公、保林を遣わし、良家の童女を閭視せしむ。年十三より十八にて止む。姿色端麗法相に合する者は載せて後宮に還り、

可否を沢視し、即ち登御に用申」

コンテストの意が算人の行事で、法相がつまり審査規準だ。中大夫、相公というのは、宦官（かんが）——男性の機能喪失手術施行者の役名で、保林というのは宮女取締役のおぼさんの意だ。徳川の大奥ならさしあたり局（つばね）クラスである。

さて「秘辛」に、そのコンテストの作法と実施の模様を書いたつぎの一節がある。

建和元年（後漢）丁亥、保林が帝から賜った丙戌詔書を奉持して中常侍（宮中総務官）に奉呈する。その勅文をそのまま書けばよろしいが、印刷所と校正泣かせになるので、わかりやすく書く。

「チンきく、賢を選び、麗を作すは隆代の先んずるところ、少女は貞静の徳あつて禁液に流聞す、それ保林とともに動止を周視し、審らかに幽隠をさぐり、それ違匿することなかれ、チン、まさにとらんとす」

原文はなかなかの名文で、むかしの衆議院

若本多久志著

「老いの坂」

送料共 五二〇円

「親こころ子心」

送料共 二六五円

開院式の勸語よりうまい。文意は、チンが意を休して、そそうのないよう審査を完璧にやれ、というイミだ。当時の帝や宮内省の役人は、格別コレという行事がないので、こんな行事をさかも大層にやってヒマつぶしをしていたとみえる。

以下は、いよいよ数多の候補者を抜き選んで、ミス宮中に指名された美女の最終審査風景である。

東の窓は、真珠貝が張りつめてある。朝陽はその真珠貝を透し、室中くまなくみちかきやき、栄（受検者の少女の名）の面上を照した。春の淡雪の如き麗貌は、泉の如きヒトミのかがやき、半月の眉に正しき鼻筋、その下の朱唇は、ほほえみしむれば白き齒は、真珠のごとく、はにかめばエクボは玉のごとし。保林は、栄の許しを得て髪を解きのばすと、艶やかに陽の光を映すそれは、手に巻いて八巻と半ばを余したり。

「おみ帯を解くのよ」

その声に、栄は真紅に頬を染め、保林の手をささぎり止めた。

「お上の礼儀さびしく、いささかのカキン（悪い点）も許されませぬ。すっかり拝見すれば、おいつくしみもましましょう」

と保林は言った。栄はハラハラと涙を流し、

眼を閉じ顔をそむけ、唇をかみつ、うなずいた。保林は恭々しく衣服をとり外せば、白艶の裸形さん然とまぶしく、日光は芳氣をかさね、ふつくらとした乳房は香氣を発して、陽光をはねかえしたうるおいで、へそは三分の珠が入り、その愛らしくぼみの下は……これ以上書くと、この少女にはむごすぎるので省く。さて、ここで当時の美女の上から下への審査標準だが、今日のヒップやバスト等の代りに尺寸をもってその場所と寸法が示されている。メートルで書きたいのだが、面

倒なので、原文のままですましておくことをお許し願いたい。

頭の先から足の裏まで七尺一寸（シナの一尺は日本の約六寸六分以下同じ）肩の広さ一尺六寸、お尻は肩の広さに比して三寸を減じ、肩から指先までの長さ二尺七寸、指は掌を去る四寸、髀から足までの長さ三尺二寸。十指は細っそりとして竹の芽生えの如く、足底は、鹿爪に似て寸余とみる。

要するに「纏足三寸の細腰」の形容をそっくり、申分なしとあって、保林は言った。

「皇帝万歳と申上げて下さい」

栄はしばしためらったが、夢うつつのうちに

「皇帝万歳」

となえると、そよ風が簾を吹きゆるがすように幽かに鳴りわたった。

雑事秘辛の客観的美人鑑定法は、詳細を極めているが、大要右に述べた通り。ところでこんどは内面的美人鑑定法が必要となってくる。すなわちいわく。

「およそ女を見るの法は、書画を見ると同じく筆路をおうて推究してはいけない。必ず遠くえかけて気魄を眺め、気魄があれば名筆である。もし気魄が停滞していれば生動せず、印版と同様なり。このとき書画は筆墨精工であっても、神韻がない。」

女色も、男が近よって詳細に眺めてのち佳処が生じるようでは、その女人の姿色はその限りに止まる。本来の美色は、水の隔てて路をふさぐとも、花や竹にさええられ、暗黒、門扉にへだてられていても、おのずと明らか

透きあらわれて、男を真に呆然たらしむるものが姿色の真である。この種の佳処は形態の中にあって、その中にあらず、形態の外にあって、しかも形態の外にあらず、到底筆絶に摸しがたい神韻をひそむ」

まるで川柳の名句の鑑定法そっくりである。内外ともに幽雅典麗、そこに宮中三千分の一が誕生するわけだが、筆者は、栄という神のような童女の後身に、稀代の悪女帝、則天武后や、呂后、趙飛燕、姐妃、妹喜、褒姒が誕生したのかと思うと、そぞろに女体の妖しさにリツ然たり得ない。

しかし、そこは中国の文人儒学である。「それ悍婦の嫉心は、悪虐奔命の性にあらず、もってそれをなさしむるは中堂の匹夫たり、権卑の分になんぞかかわるべき」てなことを忘れずに書き添えて、恐縮千万の配慮ぶりである。

高級洋菓子

プラス

堺市役所前 TEL(2)2334

秀句鑑賞

— 前月号から —

後藤梅志

花札の落ち目にも似て夫病む

(きさ子)

往時、花柳界といわず東京の中流家庭で、花札がはやり、知らない者は野暮天とされていた頃がある。(明治四十一、二年ごろ)

花札はもと、運七分、技術三分のものだがそれを運、技半々にするとともに、花札の面白さがあつた。しかし手がつかぬときは、どうしようもなかった。配る札のどれにも手約がつかないのである。こんなのを、花札の落ち目と云う。運命の神に見離されたのであり、じり貧になるのに甘んじる外はない。

つれ添う夫が、寝込んでしまったのに似るといふこの句は、的を射て居そうだ。この場合、作者に夫があるか無いかは問題でない。

妻だけが知る屋の顔夜の顔

(喜由)

世の中のでんばが早くなるにつれ、神経衰

弱患者がふえるそうだ。神経衰弱は、昼と夜とが逆になり、昼間は光りをさけるようになり、よるは生々する。頭脳労働者は総じてこの傾向にあるそうだ。私もそんな傾向にあるし、作者もそうかも知れない。

こんな亭主をもった奥さんは、気むずかしい夫を持った気苦労が絶えない。

キカイ文化には附物の、光りと音。それがどんな形で我々をむしばんで居るか。ひたすら、妻の優しい目に頼る外はないのである。ともかくもキラキラキラとマダム出る

(水車)

キラキラキラとは、服装、ハンドバッグ、指輪などの光る物を指すものと思われる。

マダムは、屋の間に、したいことをしておくのである。金策の時もあろうし、ピクニックの時も、あろうがともかく、マダムはキラキラキラと、何かを光かせて出掛けるといふ。面白い句である。

ホステスカ。普通の奥さんか。マダムか。見分けがつかないこの頃ではあるが、ともかくがよくきいて、マダムらしいと思つた。

咲く花の少なき頃よ黄水仙

(いわを)

人間の花に寄せる思慕というものは馬鹿に出来ない。それが証拠に、地下街ができるとまず花屋が目射るのである。

その花屋の中で、黄水仙を見出すのはうれしいものである。とくに花の少い一月二月の頃は水仙のさかりである。水仙の特長は、葉と花茎との調和がとれ、枝葉のやさしいこと

で知られている。床花の根締めなどには欠かすことが出来ない。

オフイスガールなどが、水仙をセロハンに包んで出てくると美人に見えるものである。

囁託にまだ青筋を立てる意気

(どんたく)

課長さんでも五十五の停年がくると、あとはとくべつの配慮のない限り、囁託に甘んじなければならぬ。電子計算機が出来てから、急に囁託の数がふえたように思うのは、思い過ごしだろうか。

何と云つても人間の数が多いうえ、電子計算機のようなものが出来ては、キカイに人が追いまくられても仕方がない。

この句のように、青筋を立てる囁託があれば、まだまだ人間に脈があるというものか。落目になったとは云え、人の子の親である限り、囁託と雖もまだまだ男一匹である。

十年のキヤリアが解禁日へ無口

(麴光)

この句は「解禁日へ無口」が大へん働らいているのである。一口に十年といつても、十年は長くもあれば、短かくもある。仮りに釣り道楽でも、十年のキヤリアは浅い方だ。

しかしこの句の場合、十年は適当な期間だ。何かしら意気込みが感じられる。網の目でも直して居る所だろうか、ほほえましい。

幸田露伴の「努力論」によると、本当の意味の努力は、釣師が釣りに。玉突きが玉の先きに、一心にねらいをつける。あのあたりの精神活動を云うのだそう。学者の説だ。

一ト握り奮発しとく産んだ朝

(みのる)

コケコッコというにわたりの啼き声のきこえそうな句である。この頃はアメリカ輸入のブロイラーというのが目に付いて、鶏卵を見ても、子供の頃好きだった玉子に対するイメージがすっかり崩れてしまつて「栄養はあるのかい」などとすっかり信用を落した。

地玉子と云われても、直接農家からもらったものでない限り、信じられない世相には、一種の政治不信をかもして居るかのよう思われる。この句を見て、蘇生の思いがした。

造花みつめて流感の長いこと

(酔夢)

今月号には風引きの句がおおい。如何にインフルエンザが全国的であるかが分かるが、私の一家も、一巡これを経験した。

この句は「造花見つめて」とあり、しみじみとした感じで、いらだたしい同病者の姿態を思い浮かべた。見つめれば見つめるほど、造花の味気なさを感じとる作者であつたろう。

しかし、春はもうそこに来てゐる。永いやりしなかった冬の季せつも、追つつけ幕をとじることであらう。

悩まない順にいびきをかく療舎

(拳法)

長い療舎生活では、些細なことでも神経をとがらすものだが、この句を見ると、作者はいびきを楽しんでゐるように見える。

どこの病舎も、四つ以上のベッドを並べてゐるが、患者同士は病状も、家族の出遣入り

も、くせも、知りぬいていて。どんな職務にある人も知つてゐるのである。

それらの人が、次ぎ次ぎかくいびきによつて精神状態が分かり、あたかも、駢の交響楽をきく観がある、療舎生活というものは、はた目に見るよりは屈託のないものであらう。

店員が足りず高血圧下り

(宗太郎)

すっかりした句である。高血圧症はふしぎな病氣なのである。普通この患者は、間違えればいちころであるから、要心に要心を重ねてゐるが、血圧は上つたり下がつたりである。それがあつた時、病氣のことは忘れるようなことになる、つまり仕事に乗り気になつて来たりすると、血圧は平常に近くなる。如何にも不思議な現象だが、戴医者にしかかつてゐると、血圧の心配ばかりする破目になる。この句がそれを証明してゐるようだ。病氣を治すにも、胆力はいゐるものである。もういいかい雪の下から春がよぶ

(一保)

今年は雪がよく降つた。北陸をはじめ山陰九州に至るまで、よくよく雪に恵まれた年だつたが、四月に這入るともう花便りである。人間の弱さをつくづく味あわされた感じだが、この句を見ると、自然の現象が如何ようにして、人間や其他の動植物を育くんで居るかということが分かるのである。

雪が積つてゐる内から、地球は一步一步太陽に近づき、冬来りなば春遠からじ。の言葉の通りになる。冴え冴えしたい句だ。

掌に花芯を残し人魂し

(葉子)

詩というものは、詩心をえてそれを詩句に綴つてゐる間に、詩心は去つてしまふ。あとから出来た詩は形骸にひとしいと云つた詩人がある。そんなものかもしれない。しかし詩人のこころはその人の目に、何かを宿すとも云う。この句を見て、作者は詩心を得たことを感じた。それは、ほのぼのとした詩であらうが、私にもそれがよく感得された。

墓碑なれど親子といゆうはあたたかし

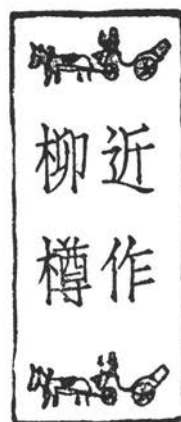
(不朽)

この句には想の高さがある。二つ並んだ墓か、先祖累代の墓かは知らないが、作者には親子といふものの関係が墓碑を通じて、あたたかく感じられたものと思う。そうありたいし、そうしたものなのである。地下へ這入つたとて、人間のたましいは、そう簡単に消え去るものではない。人は永遠を信じることが肝心だ。自然が悠久である如く。

まないたのくほみに亡母はまだ残り

(千代)

よく分かる句だ。まないたのくほみを見るにつけ、在りし日の母親の姿がよみ返つてくる作者は、いつまでも母親と共に在る気持ちがあるであらう。あとから生れる子供も、そんな気持ちを味わうときがくるかもしれない。「なんと云つたつて親だから」幾度かそんな言葉を耳にしたが、良くもとれ、悪しくもとれる。母になるに連れ、母親は恋しい。



若本多久志選

広島県 岩谷 二三枝

触発の火花とならん距離をおく
外されて輪ゴム自前の輪に戻る
蜘蛛の糸自縛の枷となる誤算
情炎の熱砂に今日を灼きつくす
矢を放つその瞬間に佇つ迷い

姫路市 前田 芙巳代

北条石仏 (三句)

禱りとは斯くも妖しく石仏群
今一度我れをみよとて野の仏
その愁い深く静かに野の仏
五月の風恋の話ものぞいて来
さりげなく言葉返して負けている

大阪市 和田 痴亭

花生きる執念水を吸いつくし
鉢だけの値と植木屋くい下り
西成は学歴無用力で来い
観心寺さとりすました梅ひらく

竹原市 森井 菁居

みじめとはかくも自分が小さく見え
瘦せ細るまでをツララの本気
自戒すればつのる孤愁よ

長女この頃

吾子ある日鏡の裏を覗き込み

倉敷市 渡辺 しげ彦

ベトナムの死角で春が咲く平和
妥協したい夫婦に話題乏しき夜
落書がないからつまらないトイレ
貧しさを炊けば貧しい音で煮え

松原市 谷垣 史好

ソバカスをいとしいものと見るも恋
妻子ある人と分かってなお燃える
軽薄の風まき上げてスポーツカー
地球儀を飾り心を広くする

島根県 堀江 正朗

意気地なしどこかにたぎる血は有った

四季の味漬物の味母を恋う
窓下へ朝のひとつきだけ雀
日向ほこ二人いてこそ心足る

竹原市 三宅不朽

雑草よりも低く野仏笑み給う
殺すぞと書いてもまるい砂文字
母がもし臉を閉じて見る愚

高卒の十日見ぬ間のつけ睫毛

八尾市 高杉鬼遊

電線の音符を消した空気銃
スエータの胸ふっくらと女 春
そう怒り給うなトタン屋根の雨
即席のみそ汁母の味でなし

大阪市 田島英夫

ママいわくパパを見習うことなかれ
桃生けて子なき二人の午後三時
闘争と聖職どこで結びつく
願わくば説教癖をもたぬ老い

仙台市 平野光道

爪きってヒゲそって退職に日が永い
床柱背負って退職かしこまり
春寒く大過なく定年退職す
廻り椅子まわして退職願書き

米子市 八木千代

いくさ捨てた国に男の子の母となり

積む雪の下で人情育くまれ
湖いっぱい染めて生きてる陽が沈む
恋人の明るい声に明日をかけ

大阪市 小谷葉子

さりげなく見つめる女の妬心
逢いたさに花の香りへ立つあせり
愛憎こもも女のおろかさ
猫柳はほすり寄せて湧く慕情

大阪市 江城功雄

病み呆けた夫へ妻の若ういる
生きる汗知らぬ女の白い指
鍵っ子の影ながながと陽が沈む

島根県 小砂白汀

かけ引が過ぎて自己への不信
傷つくまい傷つけまい上つらを撫す
愛恋の比重まさぐる舌の先

東大阪市 坂東若芽

ピンク 青 団地の窓も春の色
誤解やと解けて桜も咲き初め
ねっちりといと丁寧に断われ

下関市 志賀木石

春泥をつけて金策から戻り
家裁出た硬い顔へも春の風
五十二で惑う己に苦笑する

出雲市 王紫

鈍才の誠実軌道外れない

別人のよう浄らかなデスマスク

強情な子へ内心にある期待

島根県

堀

江 芳 子

養老院うごめく虫に似て寂し

ささやかな抵抗だまってお茶をつぐ

わびしさよ口を閉した子と対い

羽咋市

三

宅 ろ 亭

背伸びして五尺三寸五月晴れ

マジャンをやれない男隅みで飲み

父恋し父の齢を三つ越し

八尾市

宮

西 弥 生

夕刊の子の足元に雪解ける

ほほえみでかくすマダムの暗いかけ

ライバルへ素直に負けている微笑

米子市

林

瑞 枝

髪結うて女の終り派手に着る

下手な嘘云わせて税吏灸をすえ

なあんだママかと電話で子が答え

鳥取県

鈴

木 村 諷 子

女房に亡母の匂いのする日なり

海苔の香は今年の春の膳のもの

金のない方から先におじぎする

倉敷市

松

下 梁 水

詩へ遠く古城にネオン明滅す

農夫にも詩あり夕陽背に受けて
再会の契り校歌の手が集い

竹原市

出

島 静 波

これでよいのか宿かりの歩み見る

貧乏のくぼみ流れて水の意地

束縛もされず馬酔木をよく匂い

大阪市

古

川 静 波

冷凍魚年増の派手な装いか

健康な恋を見下す春の雲

春の庭妻は少女にもどつて

宿毛市

瀬

田 美 知

まださむいも少しねてなよヒキ蛙

夢いまだあせねどふえる顔のしわ

かげろうの舗道に事故の人だから

高知市

左

狼 子

確かめ合う愛せせらぎを聞きながら

ノックせず入ればすでに娘は嫌い

信じきる子の目をそらすわだかまり

草津市

久

保 和 友

愛読書さりとて聖書とも言えず

採用が決まる日ボマードすこし塗り

坂道が曲がり人生にも似たり

名古屋

長

谷 洋 月

飛躍する相談もあり春の宵
どの顔もロマンに初夏の似顔絵師

七人の敵の一人として握手

鳥取市

有田とし江

愛鳩も家族門出を鳴いてくれ

麻痺の手の病父と別れを握り合い

猫柳咲いて心のはずむ春

藤井寺市

古結百水

空振りの春取り戻す頭染め

弁当の箸で窓口教えられ

明日用の髪をネットに子の寝相

東大阪市

杉本公子

病院へ見舞の妻は薄化粧

女一人生きる決意に髪をかえ

たれが知る水盤の上の恋心

広島県

高橋鬼焼

寝返りをうつ子に過去のないねむり

反論へ女らしさをみうしない

ひとくれの土にも春の陽がにじむ

守口市

田中笑風

白昼の不倫男のサングラス

頸すじに酔漢がいる満員車

傘の朱に映えて女は意識する

八尾市

高杉千歩

ふり返りふり返り手の温み握りしめ

現実に戻えず目覚しローレライ

羞恥秘めて女煙草を吸い初め

新居浜市 村上水軍

頭髮に廻してやりたい髻を剃る

就職の荷喜びも詰める妻

草の芽土壌笑み老の鍬

鳥取県

川崎秋女

ライバルへ心の焦り見抜かれる

海猫の乱舞海から春が来る

待ちぼうけ女の業を知らされる

島根県

山本文子

夢を味方に貧乏との対話

半熟の玉子の温さ母憶う

ルージュ刷く愉しき今宵へのときめき

竹原市

生信笑子

灼熱のなおぎんぎんと燃ゆる恋

自由とはいいな地下足袋ぬいでみる

ほっこりほっこり春ものんびりやってくる

尼崎市

中谷利美

一年を貯めて二日で終る旅

歩きぐせ悪いを靴に教えられ

陸橋の下でもめてる居住権

出雲市

竹内李朋

明治百年 昭和風物詩(その二)

サーカスのジント浅草紅団

ツェッペリン仰ぐ銀座のアッパッパ

蟹工船プロレタリアの波にゆれ

京都市 藤 本 征 山

母だけは僕の残業信じてる

土に生き土を愛して嫁は来ず

河内長野市 森 本 黒 天 子

拍手した人が居るので拍手する
落される地位がないから意見吐く

鳥取市 藤 本 和 宏

びんずるさん撫でて息災願う妻
時間かっきり逢引きに来て好きになり

新潟県 高 野 不 二

遠慮なく言えと先生なお言えず
汚職まで大臣の名を知らなんだ
思い出し笑いが父の氣に入らず

姫路市 大 久 保 大 夢 子

税務署へ文句云うては見たばかり
アングラの歌を子供に教えられ
茨木市 吉 川 悦 子

甚平を重ねて桜散らんとす
萎びゆくみかんに春もついてゆき

宇部市 櫛 部 い さ 夢

悔あれどそれは思わぬ事にする
試練の手ゆるめぬ神の心知る
大阪市 奥 川 継 之 助

まじめさを堅苦しいときろう妻
信用はできず貸さねばすまぬ金

大阪市 大 谷 重 夫

大輪の菊へ陽となれ水となれ
義弟結婚
七尾市 松 高 秀 峰

甘酢っぱい人妻だけにある微笑
ささやかな妻の抵抗鱗一匹

大阪市 梅 園 摩 耶

御希望に添えぬ大学合格し
ふるさとで朝寝のよさをかみしめる
堺市 斎 藤 亜 也

ひと握りの雪煩ずりせんか心燃え
未知なる子宿して春のはつれ髪

尼崎市 平 井 露 芳

つやの出た頃に急須の蓋をわり
髪だけはフーテンにして卒業す
大阪市 藤 田 頂 留 子

文化住宅住んで文化の意味知らず
肩こらぬ先に眠たくなる活字

八幡浜市 平 田 三 立

排気ガスあびてひっそり道しるべ
影一つそっと抱いてる胸の奥
守口市 岸 本 豊 平 次

狭き門潜ってデモの先に立ち

故郷を捨てた同士で馬が合い

定年で去る夜またねと酌は立ち

出雲市 森 山 健太郎

実印だって不服さ金借る時ばかり

受付のあくびを眺め順を待ち

寝屋川市 福 富 隆 子

還暦の母に三猿買って来る

銀婚式ダイヤも似合わぬ指にされ

鳥取市 藤 本 佳 女

金釘の便りも嬉し母の筆

欠勤を風邪にして置く二日酔い

小学四年

鳥取市 藤 本 恵 子

女学生のエプロン母のにおいがし

百点のテストで雨の中急ぐ

鳥取市 藤 本 鎮 也

ブルドーザ千年前を掘り起し

秘めて置く怒りをそっと匂に残し

鳥取県 キヌガワ・キク

便秘葉夕食時のコマーシャル

融通は利かぬが信用されてはり

鳥取市 河 口 忠 志

妻と子の稼ぎが俺をゆるがせる

愛情を貯蓄へまわす妻の齢

笠岡市 谷 本 鈍 愚 坊

直したい臍の曲りをもてあまし

スタートから飛ばした男倒産し

豊中市 河 本 雪 男

八起き目のダルマ己れを疑わず

決算期ソロバン疲れた音を出し

笠岡市 高 木 洪 柿

明治百年譜

鬼蓄米英そうかと思うた時もあり

いささかの供出米へ所得税

青森県 岩 淵 一 星

食うだけに困る男に娘が好かれ

牛乳も嘔めとは医者は無理を言う

広島市 上 代 美 文

男ばかりの職場男が箒持つ

2DK子等のチャンバラ外へ出し

広島県 南 条 露 声

ウインドは一足早い春うらら

カロリーですんなり過ぎる子に育ち

大阪府 黒 田 真 砂

理屈云う子が頼もしく憎らしく

逢った日も別れた夜も煙る雨

羽曳野市 麻 野 幽 玄

燃ゆるもの失せ晩年の酒の味

労りあう姑嫁孫春近し

鳥取県 谷 無 閑

年毎に夢と希望をくり返し

四十すぎ欠伸の出そうな貞女ぶり

尼崎市 中

溪 慶 彦

もう無理はきかぬと知った二日酔い
パトロンがないではすまぬその器量

大洲市 堀

内 曉 風

恩人の嘘と知ってて金を貸し

臥薪嘗胆明治の頃の合い言葉

高知県 山

川 勝 子

みみそさへ通らず人のあらが見え

人世の黄昏死亡広告におびえ

呉市 横

田 英 詩

この町に遅ればせにもミニの群れ

雪消えてサイロすんなり春姿

和歌山市 増

田 次 章

身障者へ好奇の眼だけからみつ

収穫を減らし農村家が建ち

河内長野市 小

川 耕 人

ボーナスにお辞儀している初な妻

大げさな茶房の会話女連れ

大阪市 河

原 林 比 呂 路

幸せを願ってよき名二度も変え

名曲を思わすような心電図

岡山市 行

吉 照 路

団交の窓からネオンがせきたてる

お雛様無理算段は知らぬ顔

河内長野市 井

上 喜 醉

弁当の中身に妻の暖かさ
お粗末な天気予報に迷う春

大田市 藤

田 軒 太 楼

合格に嬉し涙が肩を抱き
あったわと親に指さす受験生

松原市 桧

木 文 清

柿一つひっそり雪の空に立ち

夜勤明け隣の梅に春を知り

熊本市 北

川 一 進

失恋をしてから変る娘の日記

親と子の真理が違うデモの列

竹原市 時

広 一 路

杉もっと伸びてこいよと天の声

香奠の字がマジックを嗅いでる

竹原市 脇

本 政 己

ほう丁がよく切れ幸な女

人事でない歳となり煙をみる

今治市 米

子 映 月

だまされてやる子の四月馬鹿

受話器から息はずむ吉報

愛媛県 鰐

本 満 子

妬心さえ許してくれぬ人かなし

あくまでもシラを切る気のノド仏

竹原市 岩

本 文 晴

頬伝う涙そのまま過去を悔い
あきらめがよすぎる男物足らず

鳥取市 小林 由多香

年賀状書くだけの筆買ってくる
無駄と知りながら弁解まだ続け

北九州市 藤田 独楽

神仏さえも浮世の波をうけ

いやという晴着を無理に着せたがり

東大阪市 竹中 綾女

雛祭り初孫に似た雛を買う

鍵こわれ寒空に夫の帰り待つ

小松市 四方天 弘美

歩こうよゴールの見えぬ人生さ

氷柱の滴にキラリ春包み

島根県 志賀 美栄

子に負けて五十路の春を二人旅

お隣りの厨明治の味が煮え

鳥取市 近藤 秋星

こうせねばここは芝居にならぬ劇

ふと見れば十五夜らしい春の月

大阪市 塩浜 一路

友情のおごり抵抗なく受ける

地味な教授がガンで逝く運命

八幡浜市 別宮 すすき

賭事も女もこわい飴しゃぶる

白髪染のコツもとび出す同窓会

仙台市 川村 映輝

姉女房何かロマンスありそうな

春の雪じっと大地に吸いこまれ

松江市 村松 酔歩

原爆忌ああケロイドの頬うずく

千羽鶴銀のは妻か夜を光る

大和郡山市 中内 孚彦

他所の子の受験まで母心配し

堺市 羽田 一扇

停車一分それでもうどん買いに出る

東大阪市 竹中 肖二

奈良の鹿毛深い毛唐の手もねぶり

大阪市 西本 保夫

食堂でオールドミスは話し好き

下関市 和泉 松風

放言も程度を越えて命取り

鳥取県 中川 定人

左手でめくる子左効きだろか

貝塚市 行天 千代

八時半旅路終って店を開け

善通寺市 伊藤 歌子

自らの命を断ちし友をいとしむ

泉佐野市 大工 静子

そつのない人無口で信じられ

泉佐野市 大 工 チ ヨ
春うらら日ねもすお茶呑む齡になり

島根県 大 森 孝 華

えり巻の狐犬にはえつかれ

京都府 福 村 飛 龍

マネキンの足はすんなり細く出来

鳥取市 山 本 珂 也 女

鼻風邪のクシヤミ続きへ湧く笑い

鳥取市 小 谷 章 代

風邪声の母に誰人と聞く電話

鳥取市 中 田 吉 春

妻だけを楽にさせてる耕運機

兵庫県 不二本 和 久
人妻だからの慕情が身をせめる

鳥取市 谷 尾 透 風

煙草銭借られ割勘言いそびれ

諫早市 原 田 明 春

私立校入試

控室金額順に名を呼ばれ

芦屋市 丸 川 愁 電 子

リーダーが脱線したで散会す

米子市 河 瀬 茂 人

お日様がまともに見えぬビルを立て

詠

須坂市 高峰 柳 児

案じてた通り喰い下る臍曲り

毒舌を痛快にきいている立場

競売の下見を睨める鬼瓦

男手のない雪国の留守みじめ

勝った汗ライトに光るインタビュ

大洲市 米 沢 曉 明

屋上へ来てお月夜と知りました

掛声も儲っている出前持ち

子の司会父うさん静かに願います

故郷は物の洗える流れあり

小切手を渡せば無理をすなという

今治市 月 原 宵 明

宝石の定価は遠い国のもの

定年後編集後記の如く生き

子の素質見栄の道具に使われる

饞舌の割には身体動かさず

和歌山市 秋 月 宏 方

ライバルもなく火葬場に勤め

明治百年きれいな川も希少価値

奥さんにしかれていても社長訓

名古屋市 長谷川 鮮 山

残り少ない余生楽しむ旅の酒

溝板の裏も洗って清掃日

痴盲録

高鷲 亜鈍

手を曳いて共に小便してくれる
開発開発とりのこされているような

主人公をめくらにしたら悲劇なり
幕に吸込んでいくモノローグ
光はわが身中にわが身は光の中に
いつしかは光の熱に身をやかん
驚きのない一日をもてあそび
うなずいてとがめもしない広い胸
中古車で杖もろともに運ばれる
生きながらひとあしさに闇をいく

新幹線水中翼船乗せてくれ
盲人と知って新聞売りにこず
考えてもいない女房に手をひかれ
鬼ごっこ鬼は私にきまつてる
一つ一つ頭に刻んでおく
腹巻に云うて聞かせる月見酒
お月さん地球上はいのちがけ
死刑には免れたけどおなじこと



本社訪問の礎山氏と編集部の葉子、一三天氏

川柳一家

・藤本 礎山・

毎年開かれていた鳥取市教育委員会主催の文芸市民コンクールにこそしは愚息藤本鎮也が川柳の部で三位に入賞した。昨年、一昨年と私も入賞しているだけに、三月十一日に表彰台に立った鎮也に、親として、先輩としてうれしさがこみあげた。

競売にされたと知らぬ梅が咲きこの選者が、これまた川柳塔の同

人諸氏で、太西八歩、河村日満、森田名人諸先生だったこともうれしさが大きかった。
五年連続で自分の家族から、短歌・詩・川柳・論文が入賞したわけだが、鎮也は本年はじめて参加しての初入賞だった。すぐ下の弟の和宏が「来年は僕がとつたる」とハリきつております。

ことしは征山(旧征也)が京都

に住んでいるので不参加だったが、恵子も中学生になったら、かならず入賞してみせると、これまでハリきつていた。
家族があげて短詩にぶつつかつていくわが家である。小集句会なら家族だけでも聞かれるたのしさは、かつては海軍軍人として血なまぐさい生活をしてきただけに、きょうこのごろの和ごやかな生活はウソのようである。神に感謝する毎日でもある。

川柳は妻の佳女がわが家では先輩で、毎月の本誌への投句も熱がはいり、秀句鑑賞にでも登載されると大変なことである。

家族同士で川柳をするたのしさは、そのまま家庭の和合につながり、これからも川柳一家として微力をつくしたいとおもっている。

(礎山氏うつす)



コクヨ
便箋



豊臣秀吉 (五)

富士野鞍馬

豪気に仕出した伊勢屋は新九郎 (六二三) 五代目の伊勢屋の旦那不料簡 (二〇一三〇) と詠み、氏政は自刃し、氏直は高野山に入り僧になったので、五代目の伊勢新みそを摺りにゆき (宮四二三) とも作られている。秀吉軍に包囲された城内では、戦うか、降伏かの評議にひまどりと、中々きまらなかった。

豊臣朝臣となる

天正十三年 (一五八五) 壮大な大坂城も出来たが、天下統一には、まだ戦いの相手は、なお四国の長曾我部元親、越中の佐々成政、九州の島津義久、小田原の北条氏直等が残っていた。

それよりも、先ず秀吉自身の地位を、日本の支配者と名実共にするため、前將軍足利義昭の猶子となって、征夷大將軍になろうとしたが、義昭にことわられた。それで、右大臣菊亭晴季の入知恵で、前関白近衛前久の養子となり、関白を宣下された。そして姓がなかったもので、藤原氏といていたが、これもおもしろくないので、「豊臣朝臣」の姓を賜わるようお願いした。翌天正十四年には太政大臣になった。

さる人の系図をきけばざうり取 (三八三) さるにても古今稀なる御立身 (一二二)

ならぬ一位をとったのは猿と蟹 (九六二)

秀吉参内ヌエほど公家恐れ (二六六一)

従一位関白太政大臣と、位人臣を極めた秀吉を、川柳はやはり猿にして詠んでいる。

秀吉公の御顔も呼子鳥 (二〇八四)

という句もある。

こうしてうちに、四国の長曾我部を討ち、越中の佐々を降し、上杉と同盟したのである。

小田原攻め

秀吉が出て小田原のこけを引き (拾五二六) 「こけ」は北条氏の家紋三ツ鱗をいったのである。

天正十八年 (一五九〇) 秀吉は、北条氏政、氏直を小田原に攻めて、これを降した。

ここで北条氏は、早雲から五代で亡びたのである。早雲は、伊勢新九郎長氏といったので、川柳はそれを「伊勢屋」と洒落て、

豪気に仕出した伊勢屋は新九郎 (六二三) 五代目の伊勢屋の旦那不料簡 (二〇一三〇) と詠み、氏政は自刃し、氏直は高野山に入り僧になったので、五代目の伊勢新みそを摺りにゆき (宮四二三) とも作られている。

秀吉軍に包囲された城内では、戦うか、降伏かの評議にひまどりと、中々きまらなかった。

とりとりに小田原勢はごたごたし (明三梅三) 小田原攻めは評定に手間がとれ (二〇三三)

又明日と小田原の上座たち (二一二五)

評定の中秀吉は三島着き (天四鶴一)

評定のうち外郎を士卒喰ひ (二〇三〇)

と川柳に詠まれ、今に、相談の長びくのを、「小田原評定」という言葉が残っている。

翌十九年二月、奥州の伊達政宗も、小田原まで来て、降伏の意を表した。その行列に金張りのハリツケ柱を持たせて来たというので、

伊達なこと張ツ附け柱金で泥み (傍三三三) という川柳がある。

またこの時秀吉は、徳川家康に関八州を与え、江戸に移ることをすすめたのである。

天下統一

秀吉は、自分の異父妹、佐治日向守の妻になつていた旭姫をつれ戻して、徳川家康の後

妻にした。そして家康に上京をうながしたのである。天正十四年十月、家康は上洛して、秀吉に対し臣礼をとった。

これより先、天正十四年（一五八六）四月には、京都に聚楽第を営み、後陽成天皇をお迎えしたのである。

そうして、天正十五年には、九州の島津氏を、天正十八年には、小田原の北条氏を征伐して、奥州の伊達政宗を帰服させ、天下はこ

とごとく秀吉のものとなつた。秀吉は天才的な政治家でもあつたのである。

続いて京都伏見桃山に、壮麗な城を築き、淀君を側室として、天正十九年（一五九二）四月、一子鶴松をもうけたが、その八月に夭折した。越えて文禄二年（一五九三）に、秀頼が生れたのである。そして、醍醐の花見、北野の大茶の湯など風流な催しもした。

大茶の湯申の下刻にやつとすみ（二六三）

秀吉の年収は

米 二百五千七百十九石
黄金 三千三百九十七枚八兩
銀子 七万九千四百十五枚七兩
運上金 一千二枚
同銀 一万三千九百五十枚

これを小判に換算すると六十万兩といわれていた。

短詩文学

作品展寸描

第八回短詩文学作品展は三月十二日（火）から十七日（日）まで、大阪市立中央図書館三階集會室で開催された。詩・短歌・俳句・川柳各部門の作家九十名、百五十点の作品が

思い思ひの装いで出展された。書道の展覧会のような画一的な作品ではなく、万葉仮名の短歌もあれば、俳画の色どりもあり、筆太の川柳があれば、青墨の軸もある。とにかく見ていて楽しいのである。

入口を入ると左側に、

黄菊白菊明治の匂いなつかしむ 路郎

故路郎先生の軸が、墨痕鮮やかに明治百年を象徴して掲げられ、右側には三輪喜正氏の初詣で柄杓で割った清め水の軸が来会者の目をひく。

生けるしるし日本ふたたび栄ゆる日 砂人
育兒書の通りに弱い子に仕上げ 生々庵
一声出して見たいとかまきり身構える 同
燕が帰って来たぞ野良に光る春 同
番傘と川柳塔の主幹の色紙が、小野十三郎
・港野喜代子、湯室月村・神田南畝・藤田露
紅・安田青風・安田章生氏ら、各部門大家の
作品と並び圧巻である。

ふく料理明日の約手は明日のこと 三碧
人生はうるさきものと知りながら 同
青木三碧氏の色紙には、それぞれ、ふくと三猿の絵が飄逸・簡潔に書かれ趣を深めていて、故曾我廼家五郎の瓢箪の絵の中の句、
楽しみは此の中にあり雪月花
と共に興味が入である。

寝台へもう来る時分午後六時 摩太郎
八木摩太郎氏の色紙は、最近胃の手術をされた経験の句を早速に披露されたものである。
紫の暮色あせて神おわし 加藤貞山

衣ずれの春も祇園の大石恵 平賀紅寿
愛されて一つの嘘を通し死に 平井与三郎
凡人の幸せ明日をうたがわず 木幡村雲
舞の手のあるとないと野球拳 金泉万楽
子守唄天満育てた市のあと 深野吾水

横額や色紙や短冊の作品が、川柳の良さを示して来会者の足を止める。会場が図書館だけに学習に疲れた学生諸君が、目を休めに来るのが多かったが、帰りにきちんと署名をしてくれる礼儀正しい若者が多かった。私は恋なれや われに愛あることし
汝が折りふかからしむと雪を給う
紹刺する余生を埋めゆけような
短冊三点を出品した。

例年出品される春果、小松園、古方、阿茶梅志、その他諸氏の出品が無かったのは淋しかった。そして、ここでも亡き松江梅里氏の面影をまざまざと思い浮べるのであった。
(橘高薫風記)

句百選

釜の艶 青葉こままでとどいてる
なんとなくなただなんとなく無帽主義

東京の声が明るい電話口

土壇場に來て丹田を意識する

目にふれるかぎりの青さ帰省する
鮭かなしオホーツク海の色をして

初一念そのもののよう女編む

雪国の娘の瞳が黒い雪の中

願うめて女は返事してくれず

天も地も人も消されて吹雪する

さてきょうも踵の減った靴を穿く

折りあらば卵こわれてやるつもり

復習の子へ転がって蜜柑くる

寝転んだ証拠に赤い糸がつき

風よ風黒髪の香をのせてこい

犬の尾は元の主人もなつかしく

盗まれる心配もなく国旗立ち

片方の耳だけで聞きたい話

郵便は来たけど書留がこない

灯は影を恵みフランス人形立ち

靴下は誰の下駄でもかまわない

早起きをすれば雀は丸いもの

肩書のみな損になるものばかり

正直をしかられてから考える

つき足して聞けばひそひそ炭の私語

雑草も生きとし生けるもののうち
蟹の泡不平は僕にだってある

悪銭じゃないのだが身につかぬ銭

母の手にかかるボタンが一つ落ち

こぼれ落ちそうにも見える冬の星

言い出せぬ不平は青い色で燃え

探し求めて郭公は啼くんだよ

溜息のように螢の光りよう

何の髭だと言われる髭を立て

蛸は鳴けど便りが来るでなし

借金へ何せりんごはまだ青い

馬の鈴我が家へ向かう音となり

待っている受話器で風の音がする

拳骨で涙をふいた気の弱り

他人にも聞いてもらって腹が立ち

王手飛車あまりに義理が無さすぎる

黒土の匂いも初恋もほのか

美しく百姓だって菜を咲かせ

百姓の不平そのまま押しだまり

居眠りの頭人形めいてくる

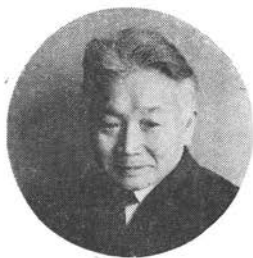
王様が白馬で通る虹の橋

はれられているヒゲ面の面白し

雪はのんのん約束の酒になり

サボテンはしかし怒ってるに非ず

ひよこピヨピヨ千切った綿のようにいる



工藤甲吉作品

罌粟は真紅なれどもたぎる血をもたず

酔うてつぶれると重たい人になり

牡丹崩れはるかに遠く雷の音

こうろぎが昼も鳴いてる妻の里

ほんとうに冬が来た朝あわただし

ひとりいるあたりを冬に包まれる

怒ってるように東北人の口

雪をぬぐように外からはいって来

あまりいい月で案山子も踊りそう

だがヒモがついてかなしいアドバルン

行李一つ納采の儀も何もし

画龍点睛くちびるを女塗る

父ににるところを母にしかれる

祝日は休むが旗は立てわすれ

半男半女明治の人を嘆かせる

家出ただ東京タワー見て帰る

日本に風呂敷というものがあり

声を聞くだけの電話をかけてくる

試作品みたいなものも女着る

ナポレオンのように居眠りする社長

受け付けが追い返せない美しさ

千日手みたいに依然平でいる

半分は片仮名という世を嘆き

チンジャラジャラチンジャラジャラと国乱る

葉瓶 かつて斗酒なお辞せざりき

銀婚はオイコラハイになっていた

北の街陽を見ぬままに暮れかかり

君が代は千秋楽に聞けばかり

亀かなしこどもの日からヒモがつき

氷雨してみちのくの人も言わず

津軽弁東京の子をこわがらせ

墮らすぐらいはハンカチを洗う如

風船は逃げるいのちのあるかぎり

風の中の草それぞれに柔と剛

見ぬふりをして腰縄の人を見る

湾という碧い鏡に五月くる

たがためにふくらむ胸を抱いて寝る

松の木の頑固は明治そのままに

ふるさとに母が生きてる心の灯

雷の如く烈火の如く父

どうしても紳士になれぬ津軽弁

金だけの世の中でなし孫と寝る

死ぬ者が死んで故郷は遠くなり

掌に受けるものみな丸く秋となる

すみれたんぼをなくして家が建ち

夕ざれば男にいとむ顔が出来

雌蕊雄蕊雄蕊雌蕊の夜となる

囲われの生ける玩具となりけり

銅鑼鳴って鳴ってひそかに溜涙

テクテクペコペコテクテクペコ靴ちびる

百句選自

アジアの歴史に人の足らざることがなく
日本に生きて生涯神を見ず

詩人死んでも星一つ落ちる世でない

朝の鳥瞰 動くものみな大阪へ

五十路を勤め ひとの家の裏通る

店の壺どれも貧しき町うつる

進学した奴に遇うた夜ひと殴る

死後に碑を文学解せざる故郷

新年の散歩が藪の墓地へ出る

ちやちな模造氷柱でペンギンよ寒いな

ネグロ無職銃とった頃なつかしむ

ボクサーをやめてスラムへ去るネグロ

ベトナムの沼英雄の死などない

しまい風呂商敵の妻どうし遇う

衆愚を叱る首相一人は出てよし

のれん分けどころか定年制を布き

女工織るわが身に纏うものでなく

茶の師匠散歩の好きな夫もつ

捨てられて舞台が夫などという

経営の合理化寺に電話ひく

住込が逃げて真赤なシャツ残る

打ち明けて仲居に馴染一人減る

孤児院の出身童話知りつくし

いくさすむたびに女のべにが濃し
日雇の何あたたむる焚火なる

宗門の会議眼鏡の僧並ぶ

出勤路いつかジンスメいたもの

秀才の家訪い兄の凡を見る

鼻血に鉄の香 働くために生き

傘さして出ただけ 昨日との違い

青空に気がつき職を厭いおり

耳もとでフルートが鳴る 恋失い

都会では女けものの靴を穿く

孔子胃を病みおり高遠なる思想

隣り合うて食べても都会他人なり

墓あばくごとく没後に日記刷る

生みの母探し当てたが二度と来ず

子を五人育てきたないもの知らず

活字氾濫読む感動を子がなくし

よく頭うつ棚義父がきて作る

出稼ぎの閑半日を普請見る

女給嬬々バーの植木は水が切れ

外は雨テレビも傘をさすドラマ

吝嗇も継いだを養子気がつかず

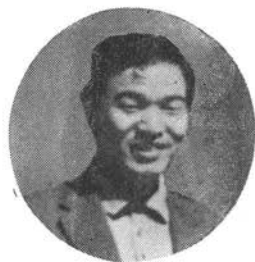
かなしみの日も妻として水の音

不身持のものは亡夫の愛しすぎ

鳥の学者は禽の眼をもつ

欠食児父の働くとこ知らず

本殿へ通訳ぎこちなくお辞儀
未亡人会お櫃をからにして終わる



早川清生作品

登呂縹渺神より先に人が棲み宿の客川原へ出ては石を投げ悲しみを蛙ケロケロとしか鳴けず愛だなんてかさなる蛙泡を生む飛んでも飛んでも鴉夕日に追いつけず思想の相剋戦って庶民死ぬ市営住宅市を愛さない人を寄せ無数の野心を栄養にして都会肥え仲居して育てた母を嫌いぬき小学唱歌家族に思い出みな違うある秋の夜のピエロめく俺も子も歳末列車へ並び雪しかない故郷落日に影のつらなる漁夫の墓質屋を出れば 今日満月大学の二部出て学歌など知らずアルサロへよく行った頃よく稼ぎ青春を無駄にし軍歌しか知らずわが校が負けて喧嘩をして帰る他所者のかなしさ景色ほめて住む葬家辞して麻雀の顔ぶれとなりいたり渴くとき飲む女をば多情とすハイクに来 駅の裏道函をみがく連休終わり新婚だけが旅にある漁絶えた浜に追分だけ残る老妓櫻録 心にいくつかの位牌

掃除婦のひとつずつ持つ砂煙傑僧の過去たずねれば父がなし捨てた子に託びおり高利とっており葬列の縮んだあとへ棺が出る耕され尽した感じ後妻くる後妻と出 食堂食べるもの合わず白瀬とは知らず後妻も笑うなり再婚し また貞節の道をゆく古墳掘る文化は民のものでなく住宅に入りいっせいに妊み出す將軍の多くは床の中で死に大臣の目に俺たちは数字なり半生はゴムで消したいことばかり物持って行かぬを忘恩とも見られ男ばかりでごみ箱にごみふえずばく一人下車いっせいにドアが開き共稼ぎの家の屋根だけ雪残る裏木戸を訪えば食卓見えて初夏女工寮暮れそめだれか髪を梳く仲居して子の夜更かしに気がつかず仲居に出病夫に話すこと多し裏切られても裏切られても宣教師工員の娶った美女は処女でなし地球病みネオン多彩を極めたり自らを描きおえたとき作家死ぬ

句百選

退屈は煙の消えるまで見つめ
呼びに来たのはのれんから首を出し
吾がものにたった三日のお正月
破れたる足袋も揃えて寝る児かな
サーカスの棧敷は少しずつにり
風船をもとの丸さにして返し
雨の音二階を降りずひるになり
銭湯へ夜業しているのを誘い
巫女一人人身御供のように居る
目札をしてから鏡ふりかえり
垢抜けがして腹の子と戻って来
芸人と芸人洒落も言わず飲み
朝の陽を待たず場末は動き初め
荷を挽いて真昼の汗が地に沁みる
角帽の対角線にある微笑
蝦蟇持って来た魚屋に手伝わせ
言訳をして店番を叱りつけ
恋人に夜の貝殻はまだ踏まれ
ピラを読みつくして電車まだ来ない
屏風までこらえる涙帯を踏み
天王寺松鶴を連れて来たいなり
敷居冷たくうたた寝の足にふれ
旧友の編集後記面白し
銭替えに行くお隣りの忙しさ
一寸した血はなめて置く大工の手

辛抱をする気涙が一つ落ち
がいせんの眼に白足袋のなつかしく
素人の箱は短かい釘を打ち
春の灯に遺稿の匂い親しみぬ
咳払いニユース一と言聞きもらし
我がもののうちで胃袋いじまし
いつまでも拗ねて居れない炭をつぎ
泥人形情婦の部屋に並べられ
添乳する妻の片手の置きどころ
赤飯の茶漬へ二日酔のひる
髪をむしって言訳を考える
淡雪は老舗の灯りつけさせる
舌打ちと共に座を立つ手くらがり
腕章は桜に痴態ゆるさない
ペンキ塗立桜頓着なしに散る
閑のある奴だと思ふほととぎす
バスに路ゆずって春の草を踏み
たばこやへ傘を持たない宵の雨
大和路で壁面に飽きる女連れ
臍の上にかろき財布と果てし
靴も置かず友達の不平言う
怖い夢春浅き日のまどろみに
マッチ燃ゆる音のみ墓石のほとりし
橋は右手へ坂道は闇へつづく
海老の眼に今宵かがやくものばかり



清水白柳作品

うっかりと元の値段でつり待ち
春日遅々として仁王さんねむくなり
今日履いた下駄を縄とび切ってくる
欠伸している鼻先きの夕桜
子守させといて落第を叱りつけ
青春をあえなく女中して過し
加持祈禱長屋のはしに注連を張り
動悸おさえて前夜の星を見ていたり
大臣の花輪は色のあせるまで
夜警して霧の重さを身を感じ
酔眼もうろう大切なものまたぐなり
壁に塗る土へ雑草根をおろし
女房は蛸オムレツは俺が食い
久しぶり矢張り張り過去にふれたがり
上方をほめる男の稱荷ずし
流連にうまいものなしひるを起き
菊活けてひととき欲を忘れたり
濁った声は澄んではこないこだま
栗のいが猫もおもちゃにしてくれず
困ったことに盛場の好きな父
夫婦二タ組どちらも女肥えている
知らぬとも言えず物知りすぐに去に
タクシーのカーブは画にも詩にもなる
欠伸しているに手料理まだ出来ず
よう肥えて蚊帳へゆうべの蚊が残り

戦後

未練などないよと言うが振り向いた
春眠曉を覚えず女房に叱られる
水着ゆたかに小波はかがとを洗う
人妻のあわれや小さいいびきかく
ひよっと来て嫁を無口にしてしま
女湯のニュース女を傷ける
うろたえた虫人間を慌てさせ
ひまな日は閑でほんとく不精ひげ
貧乏を子供心に苦にせず
気のむかぬ話めだかに足をとめ
孝行をしてほしいなと服を脱ぎ
求職にすると中学いじらしい
呼鈴へ大工が留守を言いに出る
セックスをお伽話で逃げておき
おばあちゃん袋の金魚あぶながり
ビッコひき乍らこおろぎ助かった
女連れ電車降りてもまだ笑い
母ちゃんが見てる意識の紙芝居
陽が落ちてからの孤独をパチンコ屋
割箸でつままれ毛虫うろたえる
反省の頭を搔けばふけが落ち
蠅の合掌を見ている閑な留守
提げられるようにうさぎの耳は出来
鍵っ子と呼ばれて昼の親を見ず
良い政治待つ七夕の笹しおれ

(以上四〇年七月まで)

① エスカレーターを孫の守りに使っただけで浅い句に終わった。② これも同巧異曲もつと突つ込んだ句に、深味がほしい③ この句、中七のはずませる、なら下五は齡になりでなければおかしい、齡を知りたいなら中七は、はずませてとすること、この儘では読みづらい。④ 若い人に有り勝ちな場面、上五の出だしで一句が生きた。⑤ これは平凡、説明が過ぎて何んの感興も残らない、誰もが作れる句は誰も感心せぬ句になる。

階段で全字連が押し戻し
エスカレーター孫にせがまれ昇り降り

綾女 二

階段を昇る女の後につき

階段の上から招く子の元氣

階段に艶と丸みの出る年譜

① 時事吟ながら迫力のある句になった、警官隊のざわめきも聞えるような生々しさを感ずる。② あまりにも素直過ぎて浅いものになった。③ 味気ない生活の男の姿がよく出てい

る、然かも自分を殺して明日の生活に夢を賭けている男の姿が、下五の使い方が完璧に近い佳句。④ 軽いスケッチ画、中七で元氣は判るのだから下五の説明は不要、もつと突込んだ工夫を要する。⑤ 旧家の階段を通しての感懐を述べただけで第三者に迫るものは薄い、句の上に出る語呂に陶醉して終つて自己満足に墜ちては駄目。

階段のところで夜遊び耳をたて
階段を鳴らして二階へ不貞腐り

階段の手摺りに頼る病上り
階段を若さ一氣にかけあがり

若い血がエスカレーター駆け上り
① 夜遊びのとがめが聞き耳を立てたという

軽い句、これだけでは何の余情もない。③ これも同じこと、説明が親切過ぎて後に味が残らない。③ 同じく余韻がない、句の表面に全部出過ぎて終つて後に何も残らない。④ 若さが躍動して元氣のよい句、力強さがせめてもの取柄、快よさが漂う。⑤ 同じ駆け上つて

もこれは動いているエスカレーターである若さが単的に表現されている、先ず佳句と言ふべきか。

悦子

階段をのそでさんで団地仲違い

階段のをで掃かれ乗り遅れ

階段を昇つたところで発車ベル

階段の手摺もろとも西部劇

① 老境階段一つが意に任せぬ寂しさは窺える句のリズムがよい。② 団地生活の味気なさ

がよく出ている、狭い階段一つを距てての覗み合い、異色の句材を高く買い度い。③ これは軽い、思い附きの作の域を出まい。④ もう一足早かったらと言うだけで何の感興もない道具立て揃えただけで浅い。⑤ 子供の喜びのような場面だけで一片の報告に過ぎない、達者な平素の句主を知っているだけに本月は弱い

階段の一段ごとの視野になり
階段の高さへ孤独抱きしめる

① やや誇張に過ぎた嫌いが無いでもないが、苦心する出ている、一段ごとをだんだん広い位にする方が実感に近いのではないかと

も思う。② 孤独と階段この縁のない二つに縫りを求めて一句に纏めたところ凡手ではない二段ずつ上る若さを振り返り
階段で若い匂いと擦れ違い

選者吟

六月二十日締切、八月号発表

宛先

題「花火」

同

近 詠

仲直りした孫バナナのしつぽくれ
おばアちゃんの利用価値あり台所
御令室様と私の名にならび

教育ママ己が幼ない日を忘れ
判もって来いと税務署押切る氣
酔つて寝た晩を境に日記白

今治市 長野 文庫

小松市 山上 千太郎

大阪市阿倍野区王子町四丁目二の二十二

菊沢小松園

心 配

遠山可住選

心配をしてても日本の端と端
心配をしてたこともにも言われ
遭難の報せに夜の長さ知る
一人になりて心配の殻に入る
心配を背な一杯に子は育ち
電文が解せず心配なおつのり
結納を受けた途たんに嫌やと云い
信じては居るが気になる日の噂
風邪引いただけで恋人心配し
愛情の尺度心配させてみる
戸締まりをたのんで出たを心配し
心配をよそに夜釣りにまた出掛け
その咳が一寸気になる美しさ
よくしゃべるので心配な運転士
神様も心配そうな灯がゆらぎ
心配を打ち明けられてからの恋
女一人生きるに端が心配し
心配な事かも知れぬ封書が来
同じように心配してても男親
心配をさせまいとする気のあせり
大自然心配事を吸いこんだ

英子 鶴丸 素身郎 秋月亭 旭峯子 恵子 夢いさ 芳仙 章雅 隆子 要次 七面山 梁水 魚山 宗太郎 一進 悦子 綾女 保夫 甦光

心配は親にあずけた高いびき
心配が次々出来て母達者
心配をよそに口笛もどって来
真夜中の心配神を寝つかせず
心配をしている夕陽待つてくれ
心配な話も一度念を押して
腹立ちが心配になる午前二時
猪のような気性の子を案じ
心配の風がうれしい肩すかし
心配が過ぎて二人の仲が知れ
心配へ歩調合わせている自信
心配の続く暮らしへ乳が出ず
心配をかけてすまぬと口ばかり
玄関へ医者心配を置いて去に
親の気も知らずのびやかな背丈
ほっとけほっとけと心配し
心配そうな顔へ桜の花が散り

弘朗 秋女 芳子 征山 千翁 代仕男 芳子 千代 白汀 英詩 みのる 宵明 とみ子 恵二朗 百水 無聖 十九平

他人の ことまで 心配をして廻り
心配をするなど電話あつたきり
心配のリユックがどさり帰って来
性分やろなど心配きいてやり
心配なことを風呂屋で聞いてくる
心配もかけたり肩ももんでくれ
心配をしてもとどこかぬ息子持ち

映月 庸佑 どんたく 古方 宵明 木魚 松風

心配な事もあろうに舞台の芸
人 百水

代 表

田中蛙眠子選

心配を飲み込むように茶をすすり
心配がコロッとおちた電話口
心配な目の焦点に父が居る

地 天 軸 古方 佳女

代表に嘘つくことも教えられ
アメリカへ行く代表で山を売り
代表が社長の名刺で来る葬儀
代表が和解の酒で又いがみ
代表で兄ちゃん一人叱られる
腕白の代表硝子へ詫びにくる
総代で出る子の服を誂える
代表の署名国旗の下でする
主婦代表無口な妻と思われず
代表のポストを迎えスキャンダル
代表の腹芸ピンチ切り抜ける
代表句になって拍手なりやまず
代表に出したが短気案じ合い
代表の肩の広さを信じ切り
代表は悲壮なカンパつめて発ち

旭峯 可住 勝子 無閑 どんたく 芳子 曉明 宵明 梁水 和久 磯山 一進 隆子 秋女 仙

十字架を背負い代表国を立ち
息子より若い代表なのが不満
代表で云わして貰う咳ばらい
代表校昨日の敵に励まされ
煩染めて園児代表タクト振る
代表の代理で小さく上座にい
代表は肩の重さをゆすりあげ
全身を耳に我が子の答辞聞く
声色も打って交わった御国入り
ご期待に副えぬ代表丸坊主
改憲論総理と総裁使い分け
右代表のくだりでぐっと声落とし
代表で体裁のよい咬み犬さ
月賦着て履いて代表らしくなり
代表の顔それだけの氣宇に満ち
「御代表殿」とび出す小役人
代表の弁ピシピシと突き刺り

素身郎
いさ夢
初甫
英詩
耕人
百水
政夫
英子
トク子
軒太楼
章雅
七面山
みなの
宗太郎
千代
古方
無聖

佳

代表番号かけてもかけても話し中
犬ならば此の際ブルを推すだろ
舞台裏から代表極動き
代表の一人が代表して喋り
代表の弔辞へ嗚咽波となる

人

代表も素うどん同じ音で昼
地

代表のネクタイゆがんだまま妥結

章雅
百酒
千翁
古心
惠二朗
里風
同

駅

天
国民の声が鞆にある代表無聖
軸
代表の涙も真珠色であり

植村客遊子選

時間まで駅前の灯を散歩する
客一人駅長さんが切符切り
歩いたら行ける時間を駅待ち
駅止めの荷物が着いた母の味
中卒は社旗で駅まで迎えられ
梯子酒駅の近くでもう一本
BGのデイトとにかく駅とする
引き上げた妻も眠って駅を過ぎ
駅長も筆を握る独算制
駅からの恋が芽生えたにわか雨
終列車通って駅も仮眠する
駅のいちよう公園めど四季めぐる
ハマユウを駅のホームで見も土佐
駅員がみんな親切山の駅
立喰いの蕎麦のおいしい駅に着く
駅前に住きよいいちよい乗り遅れ
故郷の駅近うなり初帰省英子

映月
美栄
みのる
道雄
痴亭
惠二朗
光道
千代
愁電子
可住
どんたく
和友
勝子
曉明
綾女
大江秋月

梅田駅ひょんなところへ辿りつき
駅からの道順名刺の裏に書き
汽車好きが今日もきている駅の昼
駅前のラッシュの中へ消えたスリ
いま聞いたばかりの駅を尋ねられ
許されぬ人がホームの蔭で泣き
駅へ来て気になりだしたガスの栓
ラブハンター駅の別れに振りむき
乗りこした駅さとうとう歩かれ
二タ駅も前から老いの降り用意
新任を迎えに駅へソリを出す
延着を知らずホームに雪が舞い
この駅に過去あり駅弁二つ買う
夢抱いて発ったと同じ駅に下り
あこがれた駅に希望の胸を張り

礎山
十九平
古方
七面山
素身郎
旭峯
正朗
和久
悦子
湖平
葵水
魚山
里風
秋女
祥月

佳

栄転の後狙うのが駅へ来る
駅迄は張り切って来た家出
駅弁の味なつかしく旅終る
ブルドーザー駅へ五分の山くずす
駅の名を読んで母子の旅つづく

人

母だけに帰りの駅で打ち明ける
駅までは一応送る義理があり
人生にポイントつけてくれた駅

地

天

不二
藤原秋月
秀峰
木魚
奇童
豊平次
鎮也
弘朗

第二百二回 (復活第七回)

大 萬 川 柳

「悪酔い」

入選発表

選者 清水白柳
 投句総数 六百二十三句
 入選 六十九句

出雲李朋
 悪酔いがまだ頑張ってる祝酒
 岡山 十九平

山口弘道
 けだもののように悪酔い扱われ

岸和田 ささ子
 悪酔いで休めば下戸が不思議がり

大阪弓彦
 悪酔いを介抱しすぎひやかされ

大阪滋雀
 人影を避けて悪酔い坐りこみ

八尾弥生
 悪酔いの世話暮れかかる花吹雪

八尾鬼遊
 悪酔いへ予算オーバーの請求書

和歌山 公作
 落武者のように悪酔いたどりつき

堺 一扇
 ゴミ箱を抱いて悪酔い寝てしま

島根 明朗
 悪酔いは失恋のためとも云えず

東大阪 清人
 無理やりに飲ませ悪酔いはきらい

大阪野迷路
 悪酔いも信号だけは見て渡り

笠岡 白梅子
 悪酔いも帰ると器用に覚めはりま

高槻 静馬
 悪酔いの横に一升堀も寝る

平田 代仕男
 悪酔いはしても折詰離さない

大田 軒太楼
 酒にこりたと悪酔いまだ云わず

大阪水客
 悪酔いが罪をかぶったこれもの

和歌山 葵水
 悪酔いの障子すこうし開けてある

大阪阿茶
 美女の膝おれも悪酔いしたくなり

大阪雄峯
 悪酔いをしてスードショー見損ない

守口 笑風
 悪酔いを下戸にまかして飲む気

呉 英詩
 悪酔いが慰安旅行をまごつかせ

悪酔いに誘った友を逆恨み

羽曳野 幽玄
 悪酔いへ男冥利につきる世話
 大阪文 秋

倉敷 惠二朗
 云わんこちゃんも悪酔いすなりあ

倉敷 素身郎
 悪酔いの背をチップにさすられる

羽曳野 桂馬
 悪酔いをするほど自腹では飲めず

尼崎 慶彦
 悪酔いの介抱割勘のあはらしさ

鳥取 佳女
 悪酔いの始末に困る馬鹿力

熊本 芳仙
 くどく気で飲ませたひとが悪酔い

東大阪 生長
 リモートが効かぬ亭主の梯子酒

大阪徹也
 飲むたびに悪酔いしたいと云い出

米子 瑞枝
 悪酔いへさすがの妻も放つとけず

大阪旅風
 悪酔いの醜態寝た子が聞いていた

倉敷 梁水
 悪酔いをしてから酒の手がありが

大阪痴亭
 惨敗の夜の悪酔いをとがめない

大阪痴亭
 悪酔いのそぶり本心覗かせる

西宮 百酒
 悪酔いのマダム本性さらけだし

悪酔いが覚めて孤独の窓八月

門真 鉄児
 元だけはあげるつもりが悪酔いし

大阪静波
 悪酔いを屈ける役があてがわれ

呉 甍光
 隣室の騒ぎを悪酔い聞いて寝る

鳥取 口満
 悪酔いを刑事のように取押え

鳥取 口満
 悪酔いにかまっておれぬパトロール

鳥取 口満
 カンバンですよと悪酔い掃き出

鳥取 口満
 中座するの悪酔いのへらず口

鳥取 口満
 悪酔いへやっぱり妻が起きてくれ

鳥取 口満
 悪酔いの件で社長に覚えられ

鳥取 口満
 悪酔いはそうかそうかと放つと

鳥取 口満
 お月さん文句あるかと酔いつぶれ

鳥取 口満
 悪酔いへぐ馳走山と積んだまま

鳥取 口満
 日曜のプランを悪酔いみなつぶし

鳥取 口満
 もう二度と飲まぬと悪酔い又誓い

鳥取 口満
 悪酔いが夜中家中皆起し

鳥取 口満
 悪酔いで寝ておりますの春うらら

鳥取 口満
 悪酔いの筋書き通り泣きはじめ

鳥取 口満
 役人の胃は悪酔いを卒業し

鳥取 口満
 放つといった悪酔い先に帰ってた

鳥取 口満
 悪酔いをケロリ忘れた高いびき

鳥取 口満
 撒けそうで撒けず悪酔い従いて

佳句

山口弘道

悪酔いを法事の酒でした不覚

藤井寺吸江

勘定がすんで悪酔い首をあげ

米子千代

悪酔いにふれず向き合う朝のお茶

大阪柳志

人質のように悪酔い置き去られ

倉敷里風

野良犬と悪酔い本気でいがみ合い

人ノ句

大阪弓彦

悪酔いヘルンペン向きを変え寝る

地ノ句

藤井寺吸江

悪酔いを家までとどけるにされ

天ノ句

大阪文秋

悪酔いに幹事が一人逃げおくれ

選者吟

悪酔いも眼鏡をかばう仕草する

大萬ベストテン(四月現在)

(同点の場合は投句先着順)

一文秋

素身郎

柳志

吸江

五弓彦

六水客

七清人

八きさ子

九十九平

十阿茶

十一慶彦

十二好郎

十三静波

十四千代

十五瑞枝

十六日満

十七代仕男

十八光道

一〇、五大阪 十九 ゆきをを

九、五大阪 二〇 静馬

九、五大阪 二一 秋女

九、〇 岸和田 二二 弘道

八、〇 岡山

八、五大阪

八、五 尼崎

八、五 高石

七、五 大阪

七、五 米子

七、〇 米子

七、〇 鳥取

七、〇 平田

七、〇 仙台

七、〇 宝塚

六、五 高槻

六、五 鳥取

六、五 山口

以下略

第九回「貞操」

締切

五月二十日

第十回「他人」

締切

五月二十日

第六月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目

川村好郎

雅号ぶつちやけばなし

しじやく



中川滋雀

なかがわ

(40)

ふと見た毎日柳壇へ、つれづれに詠んだ作に若い頃ちよつと嗜った書道の雅号

を何の気なしにそのままつけて投句したのが、幸か不幸か末席に入選し、この道へのなりそめとなりました。それが五年前の夏。続いて知った本社句会へ「盲蛇に怖じず」のこの出席したら一句抜けました。また不思議な御縁で会った故梅里さんのお人柄に魅かれ、当時の阿倍野句会へも通うようになり今日に至りました。

(S・Dデザイナー 五十二才)

せんば創立廿周年 岡橋宣介古稀祝賀

記念句会

日時 7月7日(日) 正午から

場所 尼崎市難波新地二丁二九

講演は堀口塊人氏。兼題・街・人形・飛沫・鈴・青・薫風選・花火・きさ子選・響・絆・鍵・闘魚・宝石・自由吟・宣介選。

席題二題、各題二句、締切午後二時、会費二百円。記念品呈。投句だけは6月20日着。投句料百円。投句先ニ崎市中福仲之町一七八・伊東静夢宛(古稀祝吟一句持参)

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼岡橋宣介氏の古稀祝賀と
せんば創立二十周年記念川
柳大会が七月七日に開催
(別掲)が本社の路部三周
忌句会とカチ合った。
▼水郷川柳社(大洲市)は
三月十八日に東野大八氏飲
迎句会を催された。
▼柳都二十周年川柳大会は
昭和四十三年六月九日(日)
午前九時から午後五時まで
開催。選者は川上三太郎・
白石朝太郎・三条東洋樹・
堀豊次・定金冬二・大野風
柳の諸氏(いずれも雑誌二
句)講演は工芸家小野為郎
氏と風柳主幹。会費五百円
(大野風柳川柳論集一部
贈呈)投句・出席者も宿題
は五月十五日締切。発表誌
希望者は百円追加。宛先・
新潟県新潟市本町 柳都二
十周年大会事務局
▼埼玉川柳社創立十周年と
川柳をいたま百号記念大会

が六月三十日に開催。会場
は浦和市常盤九丁目二四番
一三号、埼玉県労働会館。
題一酒盛り。いたちごっこ
・太平楽・まばゆい・十八
番・周到・年頃・百は三太
郎選。会費二百円。投句締
切五月末日(十五円切手十
枚封入)投句先・浦和市常
盤九丁目一四番六号、武藤
かめ吉方さいたま川柳大会
事務局。
▼阿部佐保蘭氏(東京都)
の二男さんが広島県音戸町
の住田高一氏長女方子さん
と三月二十三日華燭の典を
あげられた。一大役を果し
て眠い昨日今日(佐保蘭)
▼富士野鞍馬氏(東京都)
白柳さんの川柳明治百年に
敬意を表します。日本の
さくらワシントンにおくれ
鞍馬。
▼清水白柳氏(大阪府同人)
和歌山の句会に足をのぼし
て紀三井寺の桜を觀賞しひ

とり来て静かな桜の下を撰
る。白柳。
▼福田貞次氏(高槻市)三
十余年ぶりに芦原温泉・東
尋坊へー真夜中のいで湯に
首が一つ浮き一晩の街を絵
にする湯のけむり一丁路。
▼植村客遊子氏(吹田市同
人)は吹田市片山町二丁目
一〇の二、白漢子氏は新幹
線支社大阪運輸所へ転動。
松下たつみ氏は郷里の米子
局運輸部総務課へ。
▼大井正夫氏(姫路市)四
月号の百句シリーズにはシ
ャポンをぬぎました。大
陸同窓会は九月二十二日の
秋の奈良と決定。
▼西出一栄さん(大阪同人)
は三月十七日に細工谷町の
市民病院へ糖尿病で入院さ
れた。妹さんの清子さん
(大阪同人)が句会へ出席
されるようになったので玉
造川柳会では一栄さんの一
日も早いご退院を待ってお
られる。一院食になじまぬ
口をもてあまし一栄。
▼北川春果氏(大阪市同人)
は、交通局病院長の要職の
ため、三月には連日会議が
続き、深夜の帰宅もあって
短詩文学の作品展出品も作
句もままならずと激務ぶり

を寄信された。
▼後藤梅志氏(大阪同人)
は五月二十六日藤永田造船
所箕面山荘で春季誦会を催
される。日頃指導の門弟諸
氏の出演なので同好の士の
観賞を希望しておられる。
なお三月八日午前三時ごろ
近所から出火、一軒おいて
隣りまで類焼したのに梅志
氏宅は無事だった。
▼藤島茶六氏(千葉市)小
谷源氏氏(東京都)ら夢遊
会のメンバーは三月二十四
日上諏訪温泉郷へ春の旅を
持たれた。
▼中川黎明庵氏(伊勢市)
を迎えて東洋樹川柳賞贈呈
記念パーティーが四月六日
(土)午後九時から神戸三
宮センター街ミヤワキビル
五階市民同友会会場で、時
の川柳社四月句会後引続い
て開催。
▼川柳こねき二十周年記
念北海道川柳大会は八月四
日(日)正午から小樽市住
吉神社々務所で開催。兼題
は、野火・掘る・大物・操
縦・熱中・蒸発・開拓、各
題三句。投句は各題別紙に
明記二百円封入の上、五月
三十一日迄に小樽市花園三
丁目二〇の八、小樽川柳社

時	玉造川柳会吟行 五月十二日(日)
題	雲行き・ひよこり ・成立
所	未定(詳細は句報に こ)
時	南海川柳会 五月十六日(木)
題	ATS・勇気・血圧
所	ナンバ高架下 親和クラブ



疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に

タダタ製品

アリナメン

新同人紹介

川柳たましま編集

小

幡里風

十九平・恵二朗推薦

垂

井葵水

白柳・三幸推薦

▼昭和四十二年度札幌川柳社札幌賞(第五回)あかしや賞(第一回)は根本義男(札幌)、山本美佐子(江別)両氏がそれぞれ受賞された。

▼昭和四十二年度宮城野賞は、東華抄に該当者なく、夢助抄(会員の部)で渥美俊六氏(角田市)が受賞された。

▼河野春三氏(大阪市)が草刈着之助氏らの現代川柳作家や詩人・歌人・俳人諸氏と詩誌「匹」一号を四月一日大阪市此花区春日出町三一九から発行された。後援会員年額千円(一口)、誌代は送料共百五十円。

▼故藤木主税氏(神戸市)追悼句会は四月七日(日)午後一時から神戸新聞会館K・C・Cホールで開催。▼ひらな句会は三月十日

工藤安亭居で開催。可津春三善氏の名も見える。

▼八木摩太郎氏(堺市同人)は一月二十八日俳人日野草城十三回忌追悼会の墓前祭に出席、服部緑地レストハウスでの追悼句会では「み寺にてご両親に逢うたよ草城忌」の句を挙げ、故人を偲べた。岡橋宣介氏とサボテン公園を鑑賞された。

▼伊藤泰弘氏(小松市同人)は小松機械工作所社長、市社会福祉協議会会長の要職にあるが、四月七日羽田発約一カ月の予定でアメリカ西ドイツなどの業界や福祉施設の視察旅行をされる。

▼伊藤勢火、伊藤定子句集「途上」刊行記念川柳大会は三月十日(日)午前十時から国鉄天王寺駅二階会議室で開催。正本水客氏が席題の選をされた。出席者百

二十名の盛会で、本社から白柳・白溪子・静水・春巳・笛生の諸氏と薫風がお祝いを上げた。

▼山田季賛氏(高槻市同人)は三月十七日(日)第四番札所の横尾寺、第六番の壺坂寺、第八番の長谷寺を巡礼、二十日には彦根城を見学、第三十番の竹生島宝蔵寺へ。

▼近藤秋星氏(鳥取市)は第八回鳥取市民文芸作品コンクールの川柳部門で第一席に入選された「除夜の鐘聞いて夫婦の夜に戻り」河村日満、大西八歩、森田若人三氏の共選であった。

▼光武弦太郎氏(長崎県)はふあうすと四月号に、麻生路郎抄を執筆、名句鑑賞された。

▼岡田孝法氏(香川県同人)は療養所退院後お元気でられるが「何しろ子供相手の相撲ですぐタイムをとるで随分がっかりさせています。あわてずばちぼちやるつもりです」と。

▼関西川柳懇話会第二回会合は四月十一日京都今出川河原町の西角(伊藤入仙氏の店)で開催。

▼傍島静馬氏(高槻市同人)は四月七日姪御さんの結婚

式に高松へ。琴平さんへ参詣して「ご利益の七五六段長すぎる」

▼坂東若芽さん(東大阪市)から「生々庵先生はこわい方だと思っていましたのにNHKのラジオ放送のご選評などで庶民的な方だとわかりました。潮花、きさ子様、の自選百句、栞先生のペロペロキャンデー、一三夫先生の寄席の句など、病床にいて花見以上の楽しい四月号でした。

▼橘高薫風は、三月三十一日母と安芸の宮島から秋吉台へ。

一灘の味を贈る一



金露

清酒キンロ

時	所	題
五月二十日(月)	南大阪川柳会	
午後六時	厄介・早出・人材・ヘルメット	
	北生野町一丁目五乗願寺	
	トロバス国分町東五〇〇米	
時	所	題
五月二十三日(日)	堺川柳会	
午後六時	男まさり・選ぶ・妥協	
	堺市九間町山ノ口筋八木摩太郎宅	

本社 四月 旬会

会場 自 安 寺
八日 午後六時

花見どきの月曜日、そこへ小学生の入学日ときではお手上げである。

川村好郎氏の柳話は、あの話上手に好テーマを提げての登壇だけに、会場はヒソと声もせず聞か入る。

故路郎先生の「いつまでも肉と葱との仲であれ」を処生訓として二人の遺児をりっぱに育てあげた一女性の苦難史である。

この物語の中で好郎氏の人間味にもふれ、今の世にこのような美談のあることに感激もされ、女流作家の中に涙をぬぐう人が何人かおられたほどの感動柳話であった。

本月の月間賞は宮尾あいきさんである。川柳塔登足い初めの女流作家でもあり、会場の拍手も一段と高い。

(河井庸佑整理)
出席 与呂志・双葉・瓢太・白柳・美代・花梢・文秋・貞山・弓彦・柳宏子・一舟・滋雀・三求・綾女・肖二・摩太郎・金三・季賢・いさむ・静歩・好郎・六竜子・古方・静馬・トメ子・千梢・喜恵・宣介・勝晴・史好・吸江・一三夫・誓二・奈良・葛城・舟遊・生々庵・小松園・多久志・菜良子・清人・庸佑・頂留子・美已代・万的・操子・凡九郎・あいき・葉子

席題「約束」 阿万 万的 選
拗ねている子に約束の甘いパバ いさむ

約束の違えた母の気が重し
ババうそつきやと子供等さき出し
胸の抜けた顔で違約を聞いている
マイカーの約束妻は忘れてず
遺産分け口約束は当てはずれ
指切りの恋も重荷となり始め
約束の指切りさせて子は寝入り
出来そうもない公約へ票寄らず
約束をしてからデートの靴を買い
約束の時は酔うてまじと違約され
約束に一筆書いておく律義
損をして売って約手のまにあわせ
約束を果して現役退くと決め
昔昔の約束マダムで倒される
神棚にあげた約手で倒される
約束を交しとつとと夜逃する
合格にとんだ約束してしまし
約束を破る電話は妻にさせ
約束をわすれな単備で反古にされ
メモ帖に書かれ約束忘れられ
売約の赤まずまずという個展
約束を果して来いと待つ気なり
騙束を返して次を又借る気
約束があると言板は責めており
違約ずらり伝言板は責めており
約束のおもちやちばな事故現場
約束をきっちり守りあなどられ
裏口を開けて約束待っている
指切りをして両方で忘れても
とんちんかんな約束父ちゃん酔さる

席題「屋」 清水 白柳 選
かけ取りはお昼ごはんを抜きにする
昼酒が好きで信用できぬ人
職場昼恋は屋上へ駆け上り

つかの間の恋を見下ろす昼の月
チンドン屋を忘れた顔になり
大阪の色で流れる屋の川
昼抜いて買った土産と知らず食べ
腹時計十時で昼になる若さ
水道の流れる音も昼と夜
満開へるす番の犬屋を抜き
とし亭主が鼻付き合す昼下り
百円亭主野球にかけて昼をぬき
昼を寝て暮らしをたてに妻に生き
ホステスも教育ママの昼の顔
爪切りが次々回る昼休み
夜勤した夫に真昼を暗くする
月賦屋が昼の時間を狙ってき
きょうもまた茶漬で母娘屋がすみ
裏返したように妻に寝る
昼にする刻の飽の一ト削り
昼日中おしめの下もぐらされ
ふと謀叛屋のテレビが知恵を貸す
推理作家昼を夜にする雨戸閉め
啓客に嬉しく起きてくる昼寝
啓盤に似て屋上へべいの昼寝
それぞれに言訳をもつま昼の群集
ねむくなるのは昼張り切さ退け時

席題「8ミリ」 岡橋 宣介 選
8ミリの主役はいつも君と僕
8ミリへ妻の助監がうるさすぎ
8ミリを切る子へ8ミリ追つかける
8ミリを調節してうるち終わる
8ミリで撮られてますというポーズ
8ミリで顔負けをするハネムーン
8ミリで娘の荷飾が使い初め
8ミリでアベックばかり追うている
8ミリで撮りまくってハネムーン

風雪百年この石段にある丸味
百年に足らぬリレーを走るわれ
百年の起伏空の色も変わり
樹令百年まだまだ小さい杉林
百年一日矢張り吉野は春の山
百年目自動ドアに迎えられ
百年を生きてマイクへ数きびし
百年を生きて凡人らしくいる
樹令百年自動車を迂回させ
百年山百まで生きた祖父も居
百年のうちにはこんなこともある
百年のうちは大波のその小波

兼題「流れる」

西尾

葉

選

野迷路 水 百んく 公輔 芳朗 正朗 葵山 礎水 旅風 清人 芙巳代 静馬 小松園 摩太郎 瓢太 奈良子 千秋 操子

流れるままに妻となり母となり
流れる日時の流れを噛みしめる
またかいなと桃の流れる話しなり
オトメの流れる作業に酷使され
堀川にメの流れる流す京友禅
定年も近く流れるに逆らわず
涙まで流す嘘とは知らなんだ
流れるように湖面を練習艇帰る
コンペヤの流れるを見てP
ひ弱いが悲は図太い血が流れ
流されるつもりで値ぶみする質屋
故郷の名で呼ばれ流れゆく女
忘却は時の流れのせいに
赤坂で練り議会で流れる
日曜のブランをストに流される
開病へ霧の流れる窓となり
北浜の糸哀し流れる身をささえ
三流の主は祇園で手をたたき
藤の花の流れる下を訪問着

★前月分（三才・軸吟は発表済み）

兼題「決心」

川村好郎

選

花梢 肖彦 弓久志 双葉 金彦 滋彦 文秋 誓二 肖二 好郎 奈良子 形水 吸江 葉江

ボストまで来て決心が又変わり
決心がきまりコンパクトを閉じる
酒絶つと決めた前夜飲み歩き
自動扉にわが決心をためさせる
取り巻の顔で決心切りだせず
決心をせまる足どりで辻を折れ
決心をせまる荒磯の波しぶき
決心をして見直せばよい女
北風に男の意地は振り向かず
蒸発の決心女からくずれ
決心がきまると急に腹がへり
金策が付いて決心鈍り出し
相談をして決心がにぶり出し
念を押される決心は髭をそり
手をおくれている決心した手術
家裁を女将勝手につけてくれ
決心もあらたに門出の靴のつや
裸からどうやと雇う方が待ち
決心が結局金につきあたり
今度こそ産む決心が身ごもらず
家計簿へ暮しを落とす肚を決め
決心のついた女のおそろしく

兼題「決心」

柳の

選

葉

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

一字のために

川柳明治百年明治篇の句の中に中国の人名が二、三あった。句は活字の本から謄写版にのせられたものを私が孫引きしたので、一三夫さんから、字画をはっきりうつしてほしいと言われて拡大鏡を見たのだが、こんな字らしいということしから判らなかつた。何と読むのかも知らない不勉強であつた。

その一字のために一三夫さんは、中国の辞典やら人名辞典を調べてとうとう見つけて下さつたが、その為には夜中に調べ出してやと判つたら夜明けであつたということだつた。誠に申訳のない次第で、とうとう一字のために一晩費やさしてしまつて御詫びの仕様がない。

読み方でも判れば平かなにでもするのだつ

伊藤勢火・定子句集

「途上」寸評

「途上」という句集の名は甚だ味わい深いものであることが、じつと見ていると判る。ふあうすと同人の伊藤勢火・定子夫妻が銀婚と定年退職を期に出版されたもので椗元紋太氏の序文、房川素生・葵徳三両氏の跋文がある。国鉄マンであつた勢火氏の句、ご主人に心からの愛情を傾けた定子さんの句、本格的な夫婦句集である。

だがそれも知らないのだから無責任な筆者という外はない。その字は革へんに央で、おうと読むのだと云うことであつた。今後こんな字は使わないことにするが、達筆の崩した字もこんな苦労をかけることになるかも知れないのでお互に注意したいと思う。

(清水白柳)

▼訂正。四十二年十二月号「堀口大学氏と語る」の三十八P下段五行目から八行までを左のように訂正。

Presse par le jeune homme.

La servante

Trace une spirale.

川柳塔社常任理事会

四月四日の常任理事会は、故路郎先生の三周忌句会と本誌の倍加運動にしばられた。

勢火作品には

凡人に春夏秋冬ただ続き
陽を浴びて若草は動恋は静
主人敬白し本日より値上げ
寝る顔へ女まだまだ何か塗り
流行へ少し距離とる娘に育て
所詮女なり一つこと言い続け
日本中お浮かれなさい桜咲く
そらよろしおましたやろうマッチが出
定子作品には
移り住みうれし若草山よく見える

路郎忌は表紙の2のようにきまつた。せんば川柳社の記念句会とカチあつたが、七月七日はどうにも動かせない。

倍加運動は各社もおなじで、またかということになるが、よろしく協力のほどを。

出席：正本水客、清水白柳、傍島静馬、太坂形水、金井文秋、中島生々庵、川村好郎、菊沢小松園、不二田一三夫諸氏。

新刊「画信三十年」予告

現和歌山医科大学長市原硬博士と本誌表紙絵執筆中の直原玉青画伯との満三十年間にわたり交わされた世にも珍らしい画信である。この二両人の友情こまやかな師が一卷にまとめ出版して下さつたのが「画信三十年」である。お問合せは本社へ。詳細は次号に。

一陣の風に別れる立語

海と山はるかにありて夏休み
落葉たく堀そとがわは交通禍
白髪もう抜かず静かに笑うてる
徹夜だと聞けばこつちも遅う寝る
明治百年漱石静かに売れてゐる
窓口のずつと奥ではお茶を飲み
装幀内容は立派である。発行所は奈良県西大寺町二二六の三駅前住宅四一〇号伊藤勢火方川柳平城の会。B6版二百五十頁、定価五百円、送料百円。(薫風)



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

玉造川柳会 (大阪市) 西出一栄報

山波はるか帰郷の日を想い
子沢山盛ったミカンで辛抱する
制服の下は婦警と云う誇り
かくれんぼ妹のりぼん見ないふり
針金の輪になるくせがまた抜けず
母さんが甜めたら霜やけなおつて
知らぬ間にしもやけ消えていた温さ
表彰台孝女のしもやけ目に残り
しもやけがうずく早出の顔洗う
着ぶくれをせす肥満体カパーする
着ぶくれを忘れて狭い席ねらい
着ぶくれてむつつりと居る古本屋
おふくろの味ねんねくに包む愛
雪国へ出かけるオーバきゆうくつな
着ぶくれて女色気が薄うなり
着ぶくれて文楽人形思わせる
ウインクが今日は駄目だと知らし
人垣のかげからウインクしきりなり
ウインクをうったのかブイと去に
反応のないウインクのてれくささ
新任の部長ウインクで茶を所望
旅籠夜のウインクに吸いこまれ

静平 柳志 金三 柳宏子 文秋 静馬 誓二 京舟 晃一 眉柳 鬼遊 綾女 喜彦 久堂 双楽 千歩 はじめ

南大阪川柳会

金井文秋報

ウインクを蹴って下宿の灯がわびし
連れのある女ちらつとウインクす
けつたいな夢に夜明けの虚脱感
助産婦と戻って来たらし夜明け前
寝台車勝手の違う夜があける
ぶつやけ云うて夜明けのさわやか
勝手なものの夜明けを待たず釣に行き
釣りに行く日だけ夜明けの空気が
改造の柱が邪魔な位置となり
電柱があるから犬は思い出し
茶柱へ男の笑顔ささり気なし
神殿の柱をよけて礼拝し
床柱背にフンフンと聞くばかり
大黒柱の艶にふる里恙なし

六龍 形水 太庸 貞子 清子 智子 義明 滋雀 水客 肖二 宣介

うるさ型らしく靴まで反りかえり
エリートの中に置かれていた疲れ
新世帯 兩人の知恵を併せあ
うるさ型なだめる役も決めておき
小道具もくせ呑みこんだのがみよう
エリートへ横やり入れてもキャリア
遅く来て文句の多いうるさ型
孫の真似覚えて帰る里の母
エリートへ社長のお嬢あてがわれ
素人にかぶとを脱いだうるさ型
素人に貸すのこぎりを別に持ち
先代の道具不用のまま眺め
焼かな直りまへんとうるさ型自認
その真似は何の真似かと子を正し
ドアー越しにうるさい人の声がする
丸いひざ出して茶をたて花を生け
うるさ型とみたかば座がし
エリートが平凡な女好きと云う
手はじめにうるさ型から聞く意見

柳宏子 金三 好彦 弓秋 白文 吸柳 小松 双園 喜一 恒風 生明 君造 一千 凡九 郎榮

エリートも椅子の空く迄お茶を吸み
うるさ型いつか孤独の日になり
神仏も知恵をしぼってよう稼ぎ
エリートがオールハミに借があり
大工道具揃えて犬小屋ます作り
三才児の知恵みんなみな好き
大道具暗転をする声にならず
使い慣れた道具なかなか捨てられず
悪知恵にたけて上手に世を渡る
才覚も知恵も忘れて千鳥足
真似しても矢つ張り咲かぬ植木鉢
入院三日エリートのうつろなる
真似すがみにくい足をさらけ出し
エリートの自我へ同僚よりつかず

県吉 智子 静馬 若庸 水客 綾女 眉柳 肖二 喜仙 八郎 頂留子

ワイロ社 (ハワイ) 若本多久志選

旧友も社長となつて疎遠なり
旧友も無言で握る手の温くみ
観客を泣かせて舞台幕になり
幾年振り禿と白髪が手を握り
舞台馴れしてきて客の顔が見え
不精髭見せて旧友会にくる
旧友に会えば幼き日にかえり
観光団湯の宿で古い友
舞台度胸どうやらついた舞姿
旧友を訪うスケジユルも組んで発ち
ステージへあるアロハのフラダンス
旧友と吸いつくように握り合
裏方の苦心に暗れの舞台生
旧友にまさか箒も立てられず
名優の芸は舞台が狭く見え
旧友に会えば恥かし今の我れ
川柳ささやま句会

小島無聖報

無の聖 可住 永断 三代 初可 八音 村陣 雨 千尺 一 猪 泰 ヤン をさ 案山 茂子 実広 技世 近葉 古仙 清 寿 泉 栄

圭和摩宏季貴摩草八
天 天
水郎郎子賛山郎春郎

貴圭八
山水郎

弥青敏重千葉秋正吸痴敏真奈喜草双比岳水県功い幽史生雄竜白静太
呂吉わ
生峯秋夫歩子水一江亭雄砂々風春楽路太舟郎雄を玄好長峯天扇波唐

まるべに川柳会（大阪市）川村好郎報

っしやみがなごやかにして会議すゝ好

高知川柳社（高知市）川竹松風報

アメリカランド忘れたカメラをくやしがり 六童

白 天 美 百 吉 德 東 静 千 青 笑 青 金 紅 花 美 榮 小 好 宏 柳 美 暁 太
 は ち 代 水 春 郎 子 馬 米 痴 香 三 月 梢 房 郎 園 郎 子 志 房 年 路
 柳 笑 ち

摩白六宏百天青曉
天龍童子水笑香年
郎柳子

樹氷ギラギラ 夜行車の眼に泌みる
 はじめてから詫びればすんだ事で揉め
 はじめての里帰りと云う化粧する
 この浜のしあわせ富士に明けて暮れる
 富士写す日和を富士に感謝する
 病むベッド部屋いっぱい夕陽落つ
 どん底に生きている表裏のない言葉
 初めからい子に在る気熱つて言葉
 再婚へ初めて伯母の過去を聞く
 底引きの網にかかった蛸あわれ
 カラカラと樹氷を冬の風が抜け

むらくも川柳会（島根県） 藤井明朗報

運勢欄明治生れは用があり
 明

卯門
 宗尚
 飛鳥
 求女
 季替
 永断
 水客
 耕三
 三求
 白溪子

孝

せつかな話もうれしく聞良縁
冷え症の腰を包んだスラックス
運勢欄すてきな今日になりそう
ゆつくりとしたいさせたい里帰り
冷え症が若いお医者を手こずらせ
大吉の運勢財布へあたためる
弁解もせつかちすくて逆となり
運勢欄信じ一八やつて見る
冷え症は血圧までも上りかね
冷え症へ嫁の手編は暖かく

白江 祥月 芳月 美栄 正朗 加代 澄子 英子 一郎

岸和田うしお川柳会
上林加仙報

夢に來た七福神の宝船
六福は相手にせぬと七福神
手術台医者も泣きたい布袋腹
吉兆の売れゆき景氣の良さ語る
七福神佐世保の沖でひき返し
来るわる戒顔で笹が返し
サイゴンへ着けてやり度い宝船
虹子すみれ
青子
好子
多佳子
美咲
起人

2DK

★五月の詩にみどりが躍動する。スモッグマンには新緑がたまらぬ魅力だ。御堂筋のイチョウ並木をテクつくのもこれからはたのしい。

★前号の「百句シリーズ」は好評だった。白柳氏の「川柳明治百年」と「自選百句」が当分つづく。毎号同じような本になるが、このような長期企画も話のタネになろうというもの。三月号が売り切れ四月号の残部僅少ともなれば、この冒険へいい結果が出るか

も知れない。

★次号には水客、旅風、花宵の皆さんが出演する。ご声援のほどを。

★本誌の値上げ、すぐまた倍加運動と、参議員候補よりひと足早く「お願い」いたします。

☆寄席の台本を毎月四、五本勉強することになった。今東光氏のようにひと晩に五十枚。花登氏のように三十分がでかいだけにアセをかく

(不二田一三夫)

川柳塔社五月句会

日時 五月六日(月) 午後六時
会場 自安寺(妙見さん)
市電千日前下車スグ北側
(電話211・1478番)

兼題	柳話	戸田古方
「ハイミス」		
「素足」	宮口笛生選	
「実印」	菊田いさむ選	
	高橋操子選	
席題	三題(題と選者は当日発表)	各題三句
会費	百五十円	

★ 投句だけの方は切手五十円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

電話大阪 073 985 番

6月の兼題 「雑見」 「念場」 「メカホン」 「腕ずく」

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳樽 (10句) 若本多久志選

課題吟 (各題5句以内)

「七夕」 安平次弘道選
「別居」 小谷仙山選
「ライター」 吉原紅月選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳樽 (10句) 若本多久志選

課題吟 (各題5句以内)

「有名」 大山雅城選
「薬」 今西章雅選
「夕涼み」 大江秋月選

★川柳塔の投句は本社同人に限りま。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 百四十円 (送料六円)

半年分 八百七十円 (送料共)
一年分 千六百八十円 (送料共)

昭和四十三年四月二十五日印刷
昭和四十三年五月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町20番地

編集人 中島蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

〈朝鮮人蔘〉の効用

二千年以上
の伝統をもつ朝鮮人蔘が
この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも
再認識されています

ヒヤクは

この朝鮮人蔘の

有効成分をそっくり



現代人の薬です

朝鮮人蔘エキス製剤

ヒヤク

45カプセル・90カプセル・300カプセル

カプセル

- 体力を充実させたい方
- 疲れがとれにくい方
- 貧血・冷え症の方
- 老化現象の方
- 胃腸の弱い方



山之内製薬株式会社
東京日本橋本町2-5

あなたの川柳塔のためにあなたのお力ぞえを！

倍加運動にご協力ください

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストア

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年四月二十五日 印刷
昭和四十三年五月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 五月号

黒潮おどる



紀州路へ

＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 第2きのくに…(毎日)…12時40分発

急行 南紀3号…(毎日)…16時38分発

急行 臨時しらはま…(土曜)…13時10分発

＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 南紀1号…(毎日)…7時45分発

夜行直通列車…(毎日)…22時09分発

●第2きのくに号は座席指定券を他の列車は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5338

南海電車

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

風光明媚な
海岸美を
誇る

定価 百四十円 (送料六円)